

昭和63年度  
帰国研修員フォローアップチーム報告書  
公開技術セミナー  
(テレビ放送管理)

昭和63年12月

国際協力事業団  
八王子国際研修センター

八王セ

JR

88 - 03



昭和63年度

帰国研修員フォローアップチーム報告書

公開技術セミナー

(テレビ放送管理)

19049

JICA LIBRARY



1071532[4]

昭和63年12月

国際協力事業団  
八王子国際研修センター

国際協力事業団

19049

## 序 文

当事業団は、八王子国際研修センターにおいて実施してきた、テレビ放送管理コース及び日本放送協会において実施してきた、テレビジョン放送技術、教育テレビジョン番組、ラジオ放送技術コースに参加した帰国研修員に対するアフターケア業務の一環としてテレビ放送管理の公開技術セミナーチームを昭和63年8月27日から9月4日までスリランカに派遣した。

本セミナーでは指導の波及効果を高めるため、対象分野の範囲を広げ、かつ対象者も帰国研修員にとどめず所属先関係者、関係機関の者まで含め、JICA事業の紹介、最新技術情報の提供、適正技術の把握、コースへのフィードバックのための提言等をおこなった。本報告書はこれらの結果を取り纏めたものである。関係各位の参考に供しうれば幸甚に存する次第である。

なお、最後に本セミナーの実施に当たられた調査団員各位及び多大の協力を賜った関係各位に深甚なる謝意を表する次第である。

昭和 63 年 12 月

国際協力事業団

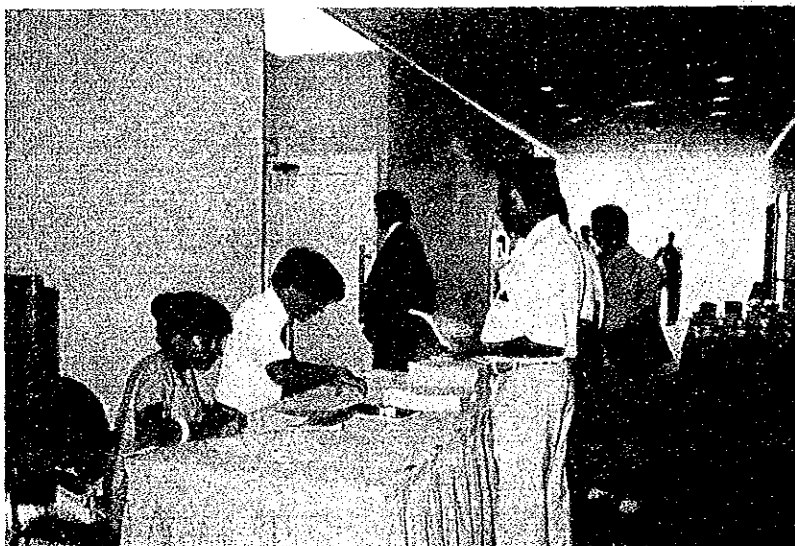
八王子国際研修センター

所長 長谷川 勝久





国営テレビ会長及び総局長と打合せ



受付風景







開会セレモニーのランプ点火



開会の挨拶をする情報省次官





講演風景



## 公開技術セミナー報告書目次

I	公開技術セミナー・チームの派遣概要	1
1.	趣 旨	1
2.	業務内容	1
3.	実施体制及び運営	1
4.	セミナー参加者	1
II	セミナーの実施計画	2
1.	セミナーのテーマ	2
2.	テーマ設定の目的	2
3.	セミナーにおける講義課題	2
4.	セミナー実施場所	2
5.	チーム派遣日程	2
III	派遣チームの団員講成	3
IV	使用教材	3
V	チームの日程と内容	3
VI	主要面会者	6
VII	各講師業務報告	8
VIII	アンケートについて	62
IX	資 料	73



# スリランカにおける公開技術セミナー派遣チーム実施報告書

## I 公開技術セミナー・チームの派遣概要

本チームの派遣概要は下記の通りである。

### 1. 趣 旨

従前巡回指導は、専ら特定集団コースの帰国研修員を対象に実施してきたが、今後これに加え、指導領域を特定コース分野に限定せず、これに隣接する関連分野まで広げ、且つ、対象者も帰国研修員にとどめず、所属先関係者はもちろんのこと、関連機関の者まで含めるなど、裾野を広げる案件も一部取り入れることにより、指導の派及効果を高めることとする。

### 2. 業務内容

- (1) 当該分野に関する JICA 事業現状の紹介を行う。
- (2) 当該分野に関するわが国の最新の技術情報の提供。
- (3) 当該分野における現地適正技術等、技術的問題点を把握し、その解決のための助言を行う。
- (4) 当該分野に関するわが国の研修に対するニーズの把握を行う。
- (5) 帰国研修員及び受講者等を含む評価会を開催し、本セミナーに対する評価を行う。
- (6) 以上の結果をふまえ、当該分野における各研修コースプログラムの改善、新設コース設定検討等今後の研修員受入事業に係る各種提言を行う。

### 3. 実施体制及び運営

セミナー班は、当該国の JICA 事務所もしくは大使館との緊密な連絡と協議のもとにセミナーの準備、実施、運営にあたる。また、実施にあたっては、当該分野の派遣専門家及びそのカウンターパート、当該国の同窓会等の協力を得てセミナーの円滑かつ効率的な運営を図ることとする。

### 4. セミナー参加者

- (1) 帰国研修員
- (2) 帰国研修員の所属機関等関係機関に所属する者
- (3) 当該国の技術協力窓口機関に所属する者

## Ⅱ 本セミナーの実施計画

スリランカに於ける公開技術セミナーの実施計画は JICA 研修事業部国際研修センター業務室と八王子国際研修センターが中心となり、下記の通り策定された。

### 1. セミナーのテーマ

テレビ放送管理

### 2. テーマ設定の目的

スリランカ国営テレビ局に対して無償援助によるスタジオ建設、機材供与等が実施されてきたが、本年9月よりテレビ放送技術に関する第三国研修が同国で実施されることになり、ソフト面の充実も必要となってきた状況に対応する一環としてテレビ放送管理に係る日本の現状及び最新の技術を紹介しセミナーを通して同国の関連分野における問題点及びニーズを把握することにより今後の研修員受入事業の向上改善に資することを目的とする。

### 3. セミナーにおける講義課題

- (1) 日本の放送行政の現状と課題
- (2) コミュニケーションの手段としての教育テレビ番組制作
- (3) 日本NHKの放送技術の現状と動向

### 4. セミナー実施場所

Hilton Hotel, Colombo

### 5. チーム派遣日程

昭和63年8月27日より同年9月4日までの9日間



### Ⅲ 派遣チームの団員構成

氏 名	担 当 業 務	所 属 先
1. 麦 島 正 靖	団長，総括，講師 (日本放送行政の現状と課題)	郵政省通信政策局 国際協力課課長補佐
2. 丹 羽 甫	講師，技術指導 (コミュニケーションの手段と しての教育テレビ番組制作)	(財)NHK放送研修センター 研修事業部チーフ・ディレクター
3. 梶 原 英 憲	講師，技術指導 (日本NHKの放送技術の現状と動向)	(財)NHK放送研修センター 研修事業部チーフ・ディレクター
4. 石 塚 明 夫	業 務 調 整	国際協力事業団八王子国際研修セ ンター

### Ⅳ 使 用 教 材

- (1) 16 mmフィルム (JICA 24 時間)
- (2) ビデオテープ
- (3) スライド
- (4) OHP
- (5) パンフレット類

### Ⅴ チームの日程と内容

スリランカにおける日程と内容は下記の通りである。

テレビ放送管理公開技術セミナーチーム派遣日程

昭和63年8月27日より同年9月4日までの9日間

8/27(木) 成田発 JL717 (12:50) → バンコク着 (16:55) NARAI ホテル泊

8/28(日) バンコク発 TG307 (10:40) → コロンボ着 (12:25) HILTON ホテル泊

8/29(月) JICA 事務所打合せ (10:00) → 日本大使館表敬 (11:15) →

(橋口所長, 新納職員) (神崎三等書記官)

大蔵計画省対外資源局訪問 (12:00) → 情報省次官, 情報省訪問 (15:00) →

Ms. Amarasekera 局次長 Dr. Gunasekera

セミ説明案内 セミ説明案内

スリランカ国営テレビ局訪問 (16:00) → スリランカ側招待 (19:30) タージホテル

Mr. K. Abeyasinghe (会長) と Mr. Perera 総局長

セミ説明案内, 施設視察

スタジオ3室 スタッフ約700名 1981年発足, 日本の援助で建物, 設備等整備

テレビ放送開始後7年 聴取料コマーシャル等の収入で運営され国家予算は使用せず。

8/30(火) JICA 事務所 (9:00) 麦島, 石塚 → 国営テレビ局及びラジオ局 (9:00) 丹羽, 梶原

セミ資料作成及び打合せ

会場設営 (午後)

8/31(水) 会場 Hilton Hotel Amethyst (Moonstone) Room

10:00 開会の辞 橋口所長 元研修員等約30名出席

10:10 挨拶 Dr. Gunasekera (次官)

10:20 挨拶 Mr. K. Abeyasinghe (会長)

10:25 麦島団長挨拶, 団員紹介

10:35 ティーブレイク

11:00 JICA 映画, 事業紹介

12:00 Lunch

14:30 麦島団長講演 (日本放送行政の現状と課題)

15:45 ティーブレイク

16:00 ビデオ質疑応答

教養番組等配分は利用者の要望できめるのか等の質問あり

17:00 終了

17:30 Flower Lounge 大使館招宴

- 9/1(木) 10:00 出席者約25名  
丹羽団員講演(コミュニケーションの手段としての教育テレビ番組制作)  
14:30 梶原団員講演(日本NHKの放送技術の現状と動向)  
17:00 終了
- 9/2(金) 10:00 出席者約30名  
スリランカ国営テレビ局総局長講演(スリランカにおけるテレビ放送の現状)  
OHP, ビデオ使用  
11:00 終了  
クリスチョネアー記入  
14:00 セミナー総括  
15:00 閉会の挨拶  
麦島団長, 局次長  
15:30 終了  
16:30 JICA事務所報告  
19:00 Hotel Galadari Meridien 内 "Ceylon Anthurium" にて団長主催ビューフ  
ェパーティー 約40名出席  
(情報省次官, 国営テレビ局総局長, 高田参事官他出席)  
21:30 終了
- 9/3(土) 9:00 コロンボ発 UL422 →バンコク着 13:50 Airport Hotel 泊
- 9/4(日) 10:30 バンコク発 TG740 →成田着 18:25

## VI 主要面会者

帰国研修員公開技術セミナー（テレビ放送管理）チーム面会者一覧

### 情報省（Ministry of Information）

Dr. Anura Goonasekera Secretary

### 財政・計画省（Ministry of Finance and Planning）

Mrs. Chandra Amarasekera Additional Director,  
Department of External Resources

### スリ・ランカ国営放送（Sri Lanka Rupavahini Corporation）

Mr. Kumar Abeysinghe Chairman

Mr. Shirley Perera Director General

Mr. Piyasiri Gunaratna Director, General Programmes

Mr. Dayad Liyanage Producer-Director, Educational Television

Mr. R. P. Ratnasinghe Assistant Director / Programmes

### 在スリ・ランカ日本国大使館

高田 稔 久 参事官

桜又 正 士 二等書記官

松本 篤 三等書記官

神崎 義 雄 三等書記官

### 国際協力事業団スリ・ランカ事務所

橋口 次 郎 所 長

新納 宏 所 員

Mrs. Manasingha Secretary

### JICA 専門家

佐々木 真 理 専門分野：テレビジョン番組制作

山崎 孝 雄 専門分野：テレビジョン放送技術

SLBC (ラジオ)

Chairman

Mr. Livy R. Wijemanne

Deputy Director, General Program

Mrs. Chitra Ranawake

Director Engineering

Mr. T.D. Radmasiri

ルパバヒニ (テレビ)

Deputy Director,

General Educational Program

Ms. Inderanee Gunarathna

Deputy Director

Mr. S. de Fonseka

General Engineering

Director,

Engineering Transmission

Mr. H. Fernando

Director, Engineering Transmission

Research & Planning

Mr. C.R.M. Abeynayake

Executive Producer, music

Mr. Somasilli Illeisinghe

Executive Producer, Education

Ms. Lalitha siribadana

Executive Producer, Documentary

Ms. Anoma Perrera

Executive Producer, Education

Mr. Migaswathe

Executive Producer, Drama

Mr. Tilak Gunawardana

Producer Education

Mr. Malkanti

Deputy Director Production

Mr. P. Gunasekera

Doctor Ex Professor C.U.

Dr. Bandora Srigunawardana

## Ⅶ 各講師業務報告

### 日本の放送行政の現状と課題

郵政省通信政策局国際協力課

麦 島 正 靖

#### 1. セミナー用資料の準備等

日本の放送行政の現状をできるだけ広範に紹介することを基本に、セミナー開催の趣旨、セミナーの対象参加者、スリ・ランカにおける関心項目等を勘案して講演内容を構成した。

セミナー参加者に、セミナー当日、講演の内容をおおむねカバーする次の冊子を配付した。

“OUTLINE OF BROADCASTING IN JAPAN” (A-4版, 19ページ 英文)

セミナーの補助材料として、OHPスライド53枚を事前に作成・持参して講演に備えた。しかし、当初予定していた講演内容のうち他の講師と重複する放送新技術については説明を省略したため、実際には38枚のスライドを使用した。

#### 2. セミナー講演の内容

講演内容については、事前に準備した項目及び内容について現地に到着後、セミナー開催までの間に行った関係機関の訪問、施設見学、JICA専門家等を通じて得た情報に基づいて関心が高いと思われる項目を中心に内容の見直しを行い、講演を行った。

講演内容は次のとおりである。

##### 1) はじめに

##### 2) 日本の放送事業の歴史と現状

###### ① 放送の沿革

###### ② 日本放送協会(NHK)、放送大学学園及び民間放送の併存体制

###### ③ 放送局の置局状況

###### ④ 放送サービスの概要

##### 3) 放送の概要

###### ① 放送体制

###### ② 放送局の免許(免許基準)

###### ③ 放送番組の規律(放送基準, 編集の自由, 番組の自主規制)

##### 4) 日本における放送事業者

###### ① NHK(設立目的, 役員, 義務(国内放送/国際放送), 受信料制度)

- ② 放送大学学園
- ③ 民間放送（規律，発展状況，民間テレビジョン放送の拡充等）
- 5) 国際放送
- 6) 有線放送
- 7) 放送ニューメディアの普及促進
- 8) 日本の放送分野における国際協力の現状
  - ① 開発途上国に対する国際協力（技術協力）
  - ② 研修員の受入れ
  - ③ 専門家の派遣
  - ④ 第三国研修
  - ⑤ プロジェクト方式技術協力
  - ⑥ 国際機関（ITU／UNESCO）を通じた技術協力
  - ⑦ 所管法人を通じた国際協力事業
- 9) おわりに

なお，講演に引き続きVTR「Welcom to NHK」（16分，英語版）を紹介し，講演の補足を行った。

### 3. セミナーの成果

セミナー参加者は，行政官，帰国研修員，テレビジョン番組制作者，テレビジョン放送技術者，テクニシャン，ジャーナリスト等，広範囲の人々であった。個人の専門分野とは直接結びつかない項目についてもメモをとるなど熱心に聴講し，質問も数多く出された。セミナーの波及効果が期待できる。

## 1. 技術セミナーの実施内容

### ◎ コミュニケーションの手段としての教育テレビ番組制作

(1) TV番組制作は，コミュニケーションの手段である。

- ① パーソナル・コミュニケーション
- ② グループ・コミュニケーション
- ③ マス・コミュニケーション

各々特徴を持っている。会話から A・V マス・コミュニケーションまで。

(2) 人類は原始時代から，言語コミュニケーションと A・V コミュニケーションを持っていた。16 世紀に印刷術が発明されて以来，人類文化は大きく進歩し，近代工業文化を招来した。20 世紀になって A・V コミュニケーションが進展して，教育分野での効率的な伝達手段として注目されるようになった。

(3) 現在では，印刷メディアと A・V メディアが情報伝達の二大手段となっている。

印刷メディア……演繹法，抽象から具象へ

A・V メディア……帰納法，具象から抽象へ

(4) 教育分野では印刷文字を手段として情報を伝える方法に A・V メディアを手段として伝える方法を追加した。印刷文字を目で読み論理思考を経て理解するプロセスより，映像を五感で受け取り理解するプロセスの方が，効率的な方法である。

(5) 映像は豊かな情報である。

- ① 普通見ることができない映像を作ることができる，海底高空撮影，簡単に行けない外国の撮影。
- ② 顕微鏡撮影，スローモーション撮影，コンピュータ・グラフィックス，DVE の利用。



③一部をドラマタイズしたり，人形やグラフィックを利用して具体的映像で見せる。

④専門家による，実験を十分な予算で行う。

⑤事象を極限状況に強調して示す。

(6) こうした映像手法は，制作動機を作るためにある。それは同時に学習動機となって，活々とした学習ができる。もっと知りたいという興味を刺激するためである。

(7) 映像の教育現場での利用方法

教師は事後指導で映像情報を文字情報に置き換えて知識の定着を計らねばならない。

○参加者 約25名

○所要時間 約2時間30分

・10時～12時30分

○参加者の反応

教育テレビ要員をはじめ，元コロポ大学教育学教授，ITN番組制作要員，カメラマン，日本での研修受講者等多数が参加。質問はセミナー終了後の昼食会まで続いた。

○今後の研修要望

研修枠を教育と限らないで拡げてほしい。カメラマン，エディター，ディレクターを一組としてドキュメンタリー研修してほしい。(教育テレビPD，ミーガスワッタ)

日本の音声ダビングシステム(ニュース，番組交換の時など外国語を本国語にダビングする方法)，一般番組(ドキュメンタリーを含む)研修で，研修タイトルを決めてはどうか，例えば「世界平和」「情報化社会」「ニューメディア」など。

(コロポ大学教育学博士，バンドラ・スリグナワルダナ)

◎ NHKの放送技術

(1) 現在のNHKの放送技術

NHKの放送の概要，NHKのネットワーク，現在のNHKの放送技術についての解説およびVTRの視聴。

・「日本の放送」NHKインターナショナル

(2) 最近の放送技術開発

放送の技術開発を支える技術，放送におけるニューメデ

ィア，特に音声多重放送，文字放送，緊急警報放送，放送衛星，ハイビジョン放送について，最新のスライド等を用いて解説。

○参加者 約25名

○所要時間 約2時間40分

・14時30分～17時10分

○参加者の反応等

今回参加した技術関係者は，いわゆるエンジニアが大半であり，セミナーへの関心，理解度は高かった。特に，今年度10月以降に予定されている，第3国研修がスリランカ・テレビ放送協会を主催機関として実施されることになっており，今回セミナーで使用したOHPシート，VTRテープ等の資料提供の要望が強かった。これらの資料の内，提供可能なものは，山崎（技術），佐々木（放送）の各専門家を通して提供した。

これまで継続して実施してきたTEC等の研修結果は現場で大きな成果を上げている，今後の研修として次のような要望があつた。

- ・デジタル技術とその応用
- ・コンピュータ技術
- ・保守技術
- ・電源関係技術（エンジン発電機，電源制御等）
- ・空調関係技術
- ・技術管理

スリランカ・テレビ放送協会への日本からの技術援助は，技術施設の充実，技術者の質の向上に貢献している。要望事項，局内の雰囲気から，今後，自力でのシステム構築，維持管理を行うことへの意欲が伺える。

## 2. スリランカの放送局事情

現在スリランカの放送機関は，次の3機関である。

- ・スリランカ・テレビ放送協会（Sri Lanka Rupavahini Corporation - SLRC）
- ・スリランカ放送協会（Sri Lanka Broadcasting

Corporation - SLBC)

- ・インデペンデント・テレビ・ネットワーク (Independent Television Network - ITN)

今回の派遣の主目的は、技術セミナー開催であり、現地放送局事情の調査に多くの時間を割くことはできなかったが SLRC, SLBC の 2 局を表敬訪問する機会がありその施設を見ることができた。

#### (1) スリランカ・テレビ放送協会 (SLRC)

##### ○ SLRC 局成立の経緯

SLRC は、日本政府の全面的な施設、機材の供与と技術協力によって作られた。

1982 年 2 月 15 日放送開始。

1983 年 5 月 16 日から高等学校 3 年生向け理数科 6 科目の学校教育テレビ放送開始。

1985 年 11 月、第 2 次供与として、400 平方メートルのスタジオおよび VTR 編集室などの制作棟が完成。

1986 年、自助努力によって管理棟と教育テレビ制作要員室が完成。現在に至る。

##### ○ テレビジョン放送の現況

SLRC は国営のテレビ放送局で、コロombo 市にある本局の他、全国に 6 つの放送所、中継局で放送網を構成している。主管官庁は情報省である。情報省は昨年 1987 年までは内務省の情報部であったが、昨年、省に昇格した。今年 1988 年、SLRC 放送総局長の A・グナセケラ氏が事務次官として就任している。

##### ・ 組織と運営

SLRC は 7 人の運営員、ボードメンバーと、その中の 1 人が任命されるチェアマン (会長)、K・アベシンハ氏によって管轄されている。職員は現在約 700 名で別表の組織によって運営されている。

- ・ 1982 年テレビ局が日本政府に供与され運営を開始したとき、テレビ局の運営財源は、

・ 援助額 約 37 億円

・ 援助額 約 15 億円

・ グナセケラ氏は、1983 年 10 月、情報局部長からそれまで空位であった SLRC の放送総局長に就任した経緯があ

・ 別添、SLRC 組織図参照

- ①テレビの受信料
- ②国家予算からの補助
- ③コマーシャル料などの放送時間帯売却料

の3本建てであった。

初年度の収支については、

- ①受信料：1,060万ルピー
  - ②国庫補助：200万ルピー
  - ③コマーシャル料：900万ルピー
- 総収入 2,160万ルピー
- 総支出 2,828万ルピー
- 赤字額 668万ルピー

・減価償却を含まず

である。しかし、その後受信家庭の増加、約50万世帯、それにコマーシャル料の収入増などから1985年度からは国の補助金を断わり、黒字で自主運営を行っている。

そして、メンテナンスに必要な機材費や外国から購入する番組費の一部などは、自前でまかなえるようになった。受信料は、(受信総世帯数：約50万世帯)

- ①白黒テレビ：150ルピー/年(60%/受信総世帯)
- ②カラーテレビ：250ルピー/年(40%/受信総世帯)

である。スリランカの総人口は約1650万人、中北部の丘陵地域には電力サービスのない村があったり、北部を中心としたタミル族との民族紛争が1983年以来続いており、受信料の収納が困難なことを考えれば、テレビ受像機の普及は可なり進んでいる。

現在1988年の受信料収入は、6,768万ルピーで、これに加えて約3,000万ルピーのコマーシャル収入が見込まれている。

#### ・放送番組

総合テレビ放送は、日曜日は午後3時30分から、月曜日から土曜日までは毎日午後5時から、深夜11時から12時まで、週平均40時間の放送を行っている。番組は、ニュース、ドラマ、音楽、教養、社会教育

- ・別添、放送番組表参照
- ・米、英、西独、日本などからの  
供与調達番組

子供向けと変化に富んでおり、自主制作番組55%、  
外国調達番組45%となっている。

学校放送テレビ番組は月曜日から金曜日まで、毎  
朝10:00から11:50まで、高校3年生の大学進学学  
級(理科クラス)向けに放送されている。週平均放  
送時間は6.5時間で英語の番組を除いて、ほとんど  
自主制作番組である。放送している学校放送番組は  
ほとんど理科番組であるが、わずか6年にも満たな  
いテレビ局の歴史と経験にもかかわらず、レベルの  
高い番組が多く、世界的な教育番組コンクールであ  
る日本賞の常連であり、入選もしている。

・ 1986年

現在の目標はより低い学年向けの放送を実現するこ  
とである。しかし小中学校へのテレビ受像機の設置、  
普及と放送同時利用のためには、もう1チャンネル  
新設し放送しなければならないなど、しばらく準備  
期間が必要であろう。

一般的にテレビ受像機の普及はめざましく50万台  
に達している。これはスリランカ300万世帯の6軒  
に1台の割合で、普及率16%にあたる。しかし1台  
の視聴者数は7~8人と多く、視聴者の数からすれ  
ば、もつと高い普及率に相当すると言われている。  
日本の例に当てはめると、ちょうど昭和34年、皇太  
子御成婚の年、テレビ受像機の普及率が15%から25  
%に達して、『テレビ時代』、映像文化時代に入っ  
たと言われていた時期に相当する。まさに、テレビ  
時代が始まろうとしていると言えるだろう。

昨年放送されたNHK制作の『おしん』前半の98話  
の視聴率は76%とニュースの85%に次ぐ最高の率を  
あげ、国中の話題になったと言われるが、こうした  
ことも、スリランカの社会がテレビ時代に入ったこ  
とを示していると言える。

#### ・ 放送施設

SLRCの放送施設は、別添資料、「スリランカに

おけるテレビジョン放送の現状 (PRESENT SITUATION ON TELEVISION BROADCASTING IN SRI LANKA) に詳しく述べられている。写真資料と併せて参照されたい。

日本の技術援助により、SLRC の技術施設はNHKのローカル放送局と同程度か、それ以上の充実した施設である。今後の施設および機材の有効活用が期待される。

・将来計画

学校教育テレビ放送を拡充して、小中学校向けの放送を行うため、もう一つのチャンネルを新設する計画がある。来年1989年から90年にかけて実現したい意向であり、ポストプロダクション、マルチオーディオ収録スタジオなどの付属設備の供与について日本政府に折衝中であるという話であった。

(2) スリランカ放送協会 (SLBC)

SLBC は、中波、短波、FM の音声放送を実施している。中波 (ラジオ) 放送は1925年12月、日本より7ヶ月遅れて、英国統治時代放送を開始した長い歴史を持っている。放送施設は老朽機器が多くSLRC とは対象的であった。施設は多くの木造小スタジオと20年から30年以前の機器で構成された副調整設備および主調整設備、全真空管式放送機であり、安定な放送の確保にはかなりの整備が必要と判断される。

現在、NHK の国際放送中継局の設置協力についての折衝が進行中であると聞いた。

(3) インデペンデント・テレビ・ネットワーク (ITN)

1979年、西独人が運営していた3/4インチUマチックのカセットVTRを使用した私営の小テレビ局を国営テレビ局に移行した。出力1kW の小規模な放送所を持ち、首都コロンボ市内のみのサービスエリアである。番組は海外から提供された英語番組が中心で、ニュースはSLRC のものを同時に放送する形をとっている。

・別添、写真資料参照

スリランカ・テレビ放送協会 (SLRC)



SLRC 全景

鉄塔には STL アンテナ, FPU アンテナ  
地球局からの受信アンテナが見える







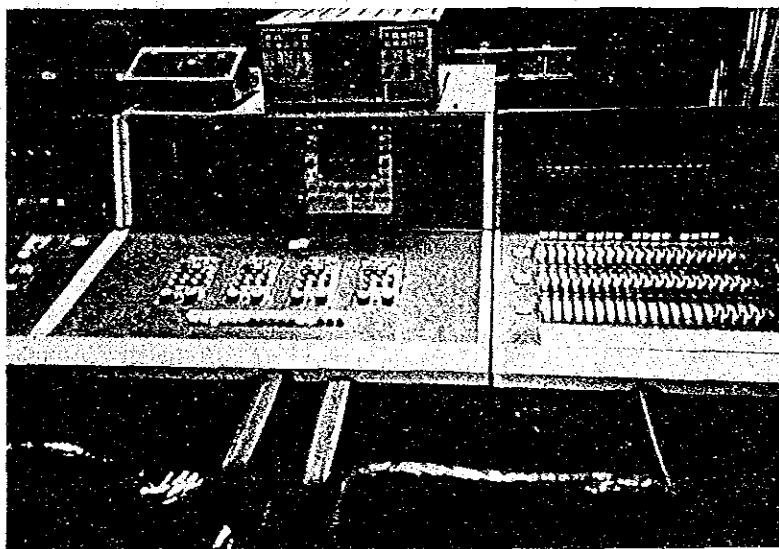
パラボラアンテナはインド放送衛星受信アンテナ



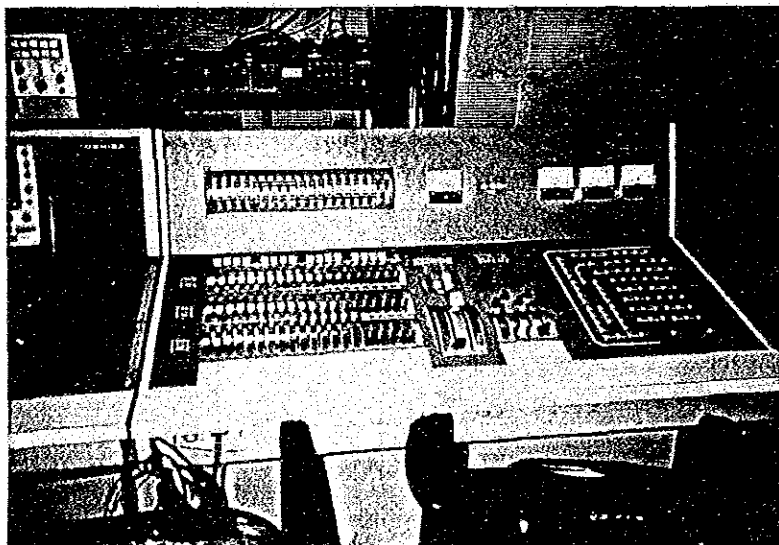
第一スタジオ



副調整卓全景

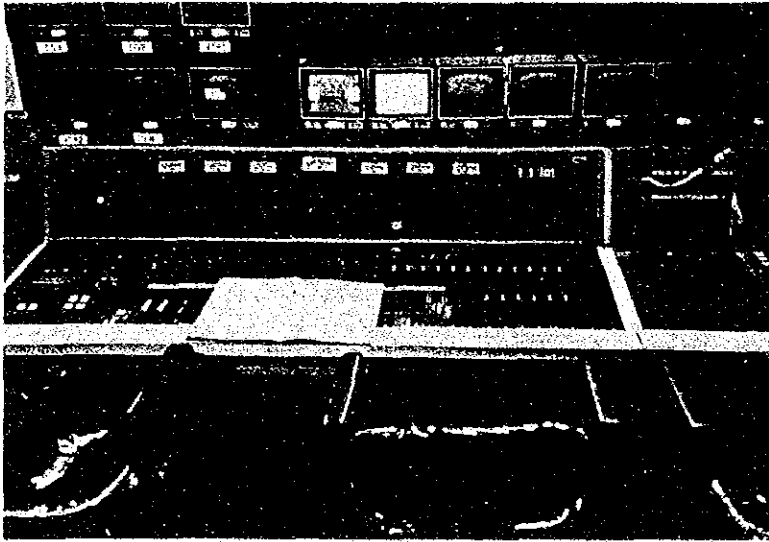


カメラコントロール卓

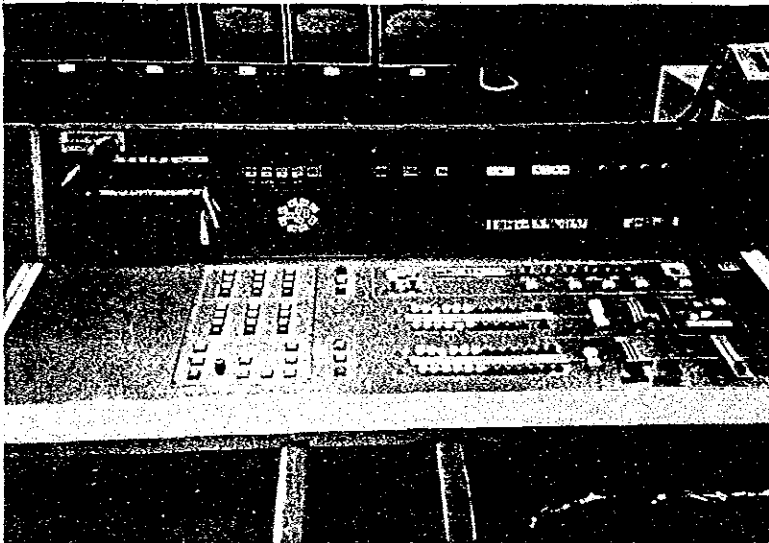


照明操作卓

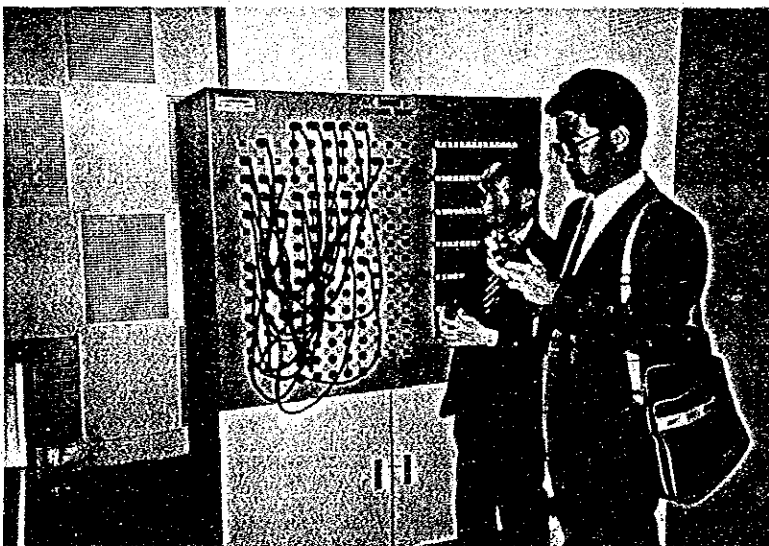




音 声 卓



ス イ ャ ー 卓



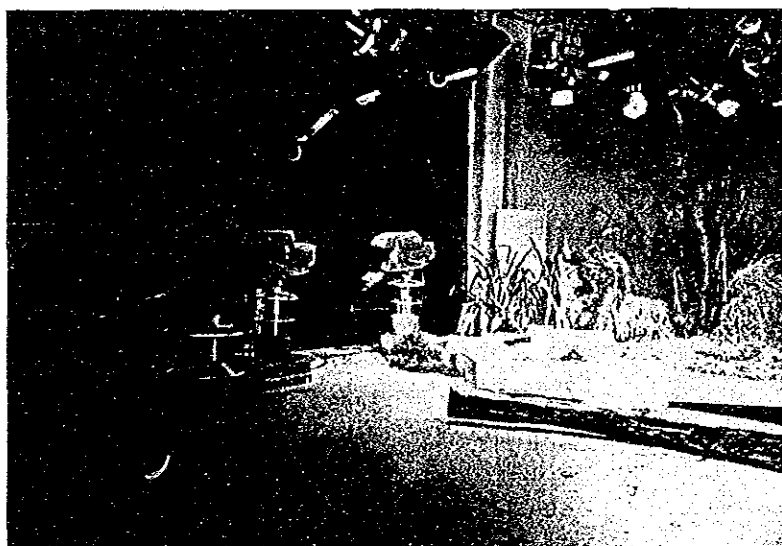
照 明 操 作 盤



第一スタジオ



カラーFSS



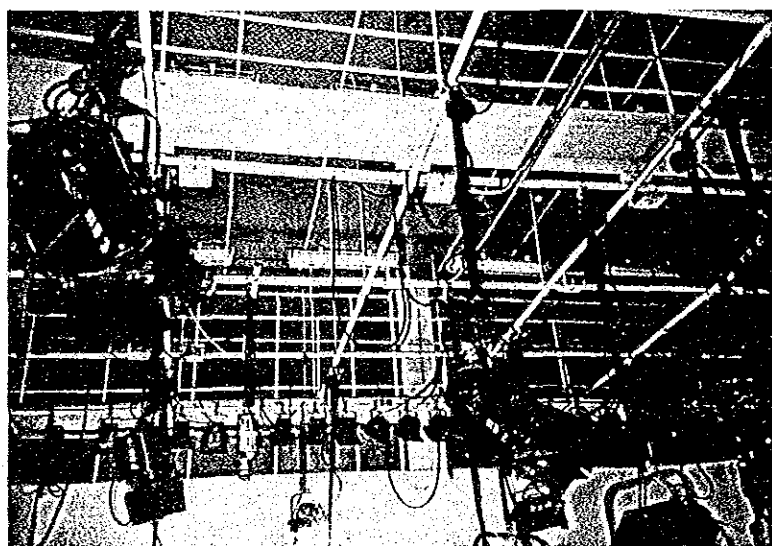
スタジオ全景







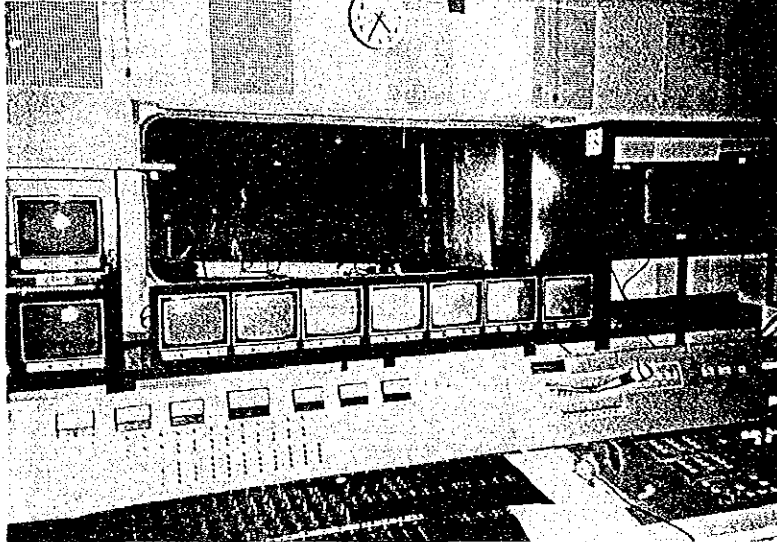
スタジオ全景



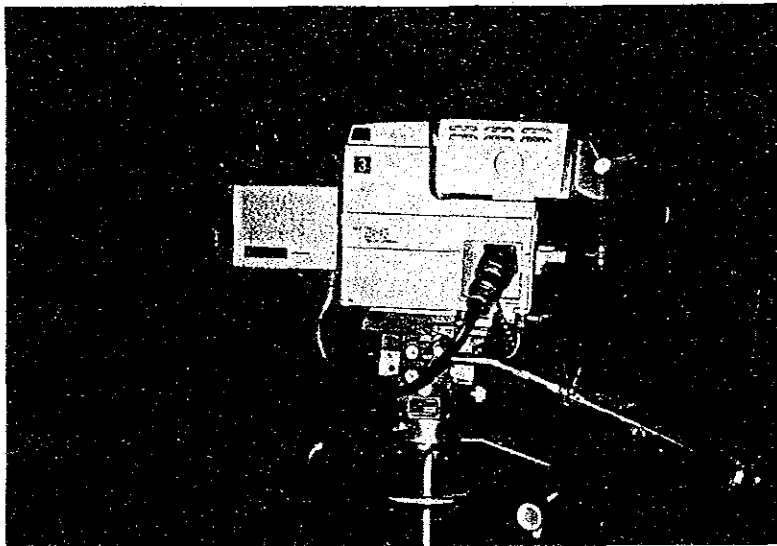
照明器具のセット状況



第二スタジオ

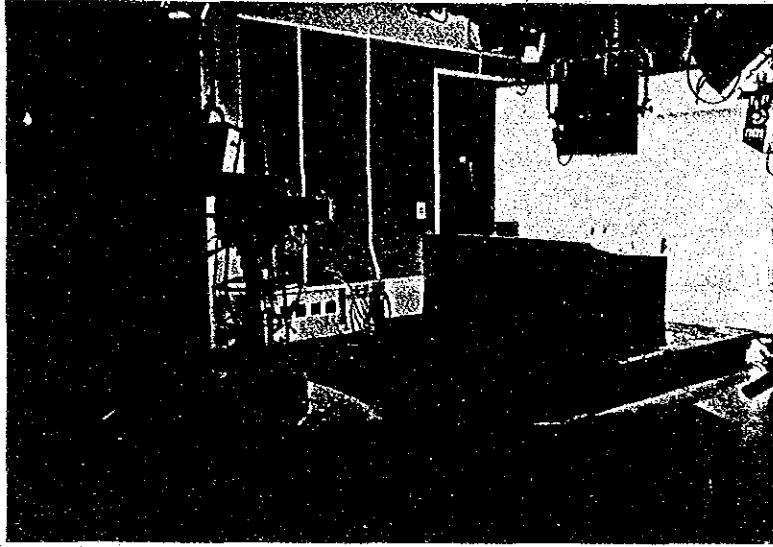


副調整室（設備は第一スタジオと同じ）

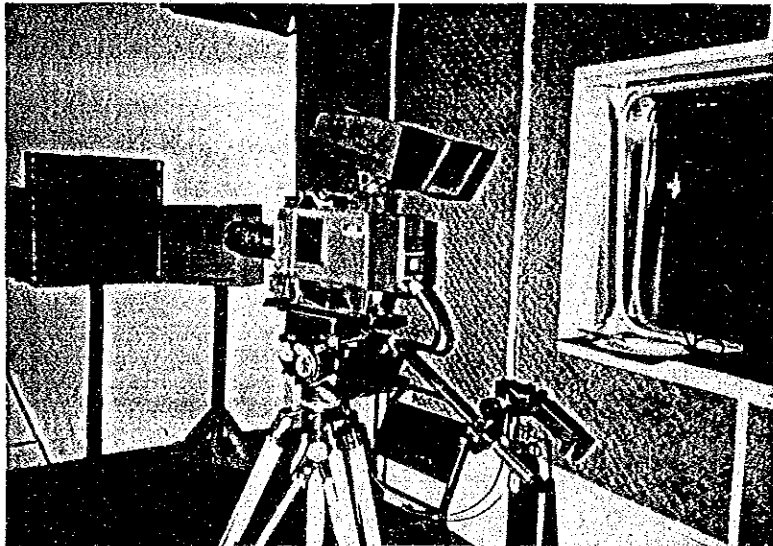


カメラ（NEC 整 3 P）





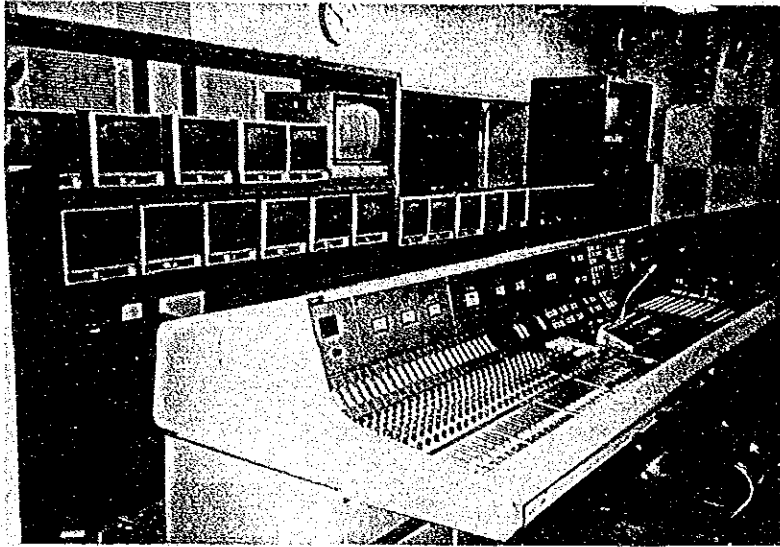
ニュース用セット



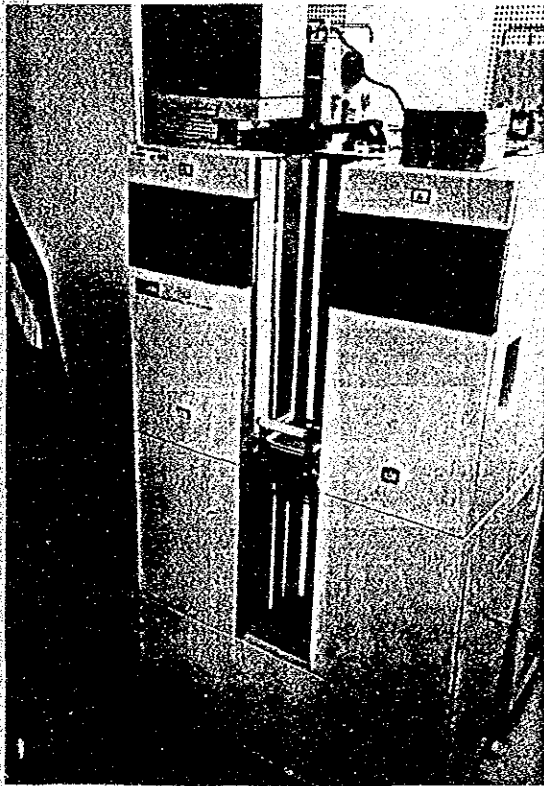
パターン撮影用簡易カメラ



第三スタジオ



副調整室全景



カラーFSS

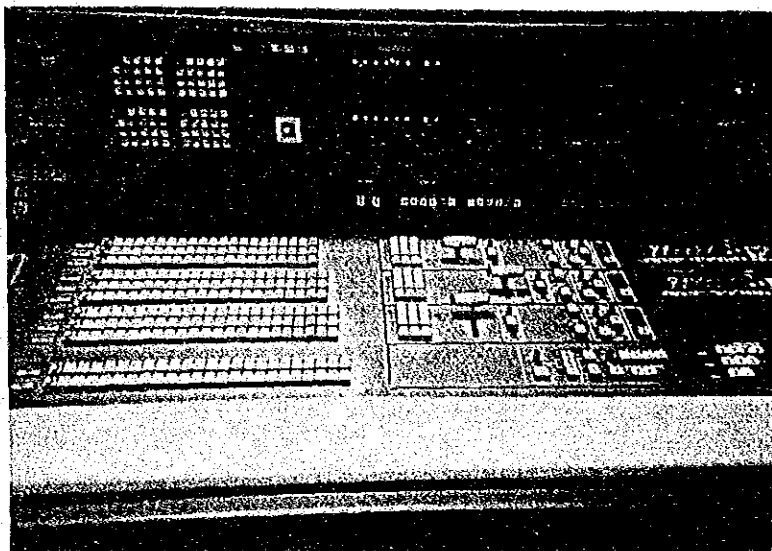


音声卓





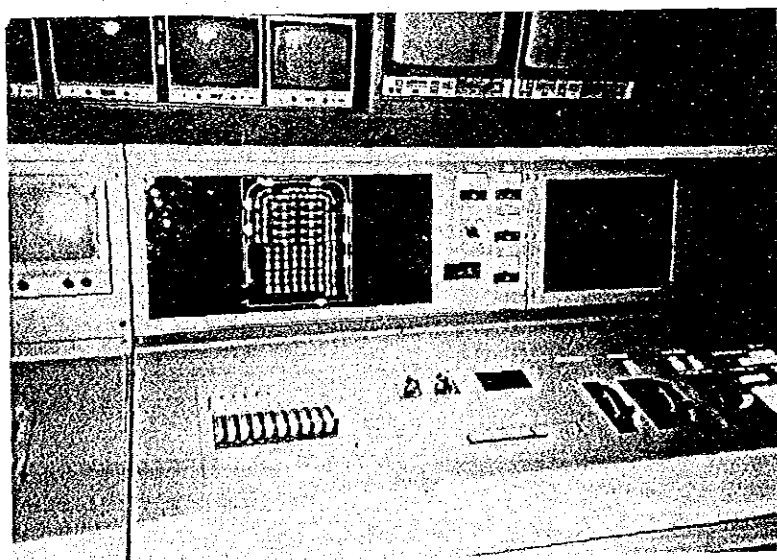
スイッチャー卓、  
DVE等 FULL 装備



カメラコントロール卓

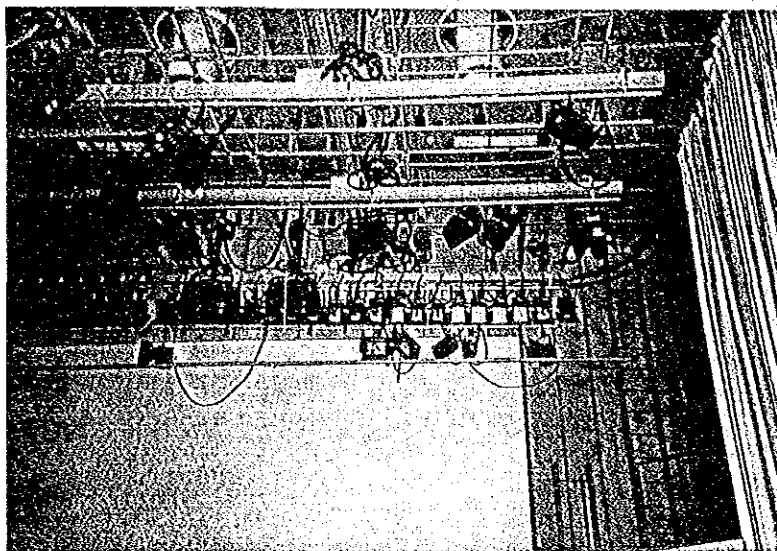


コンピュータ  
コントロール照明操作卓

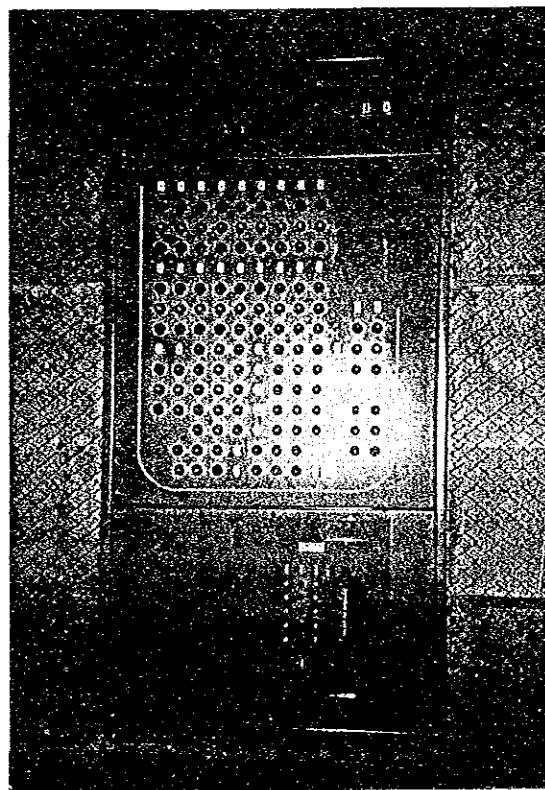




第三スタジオ



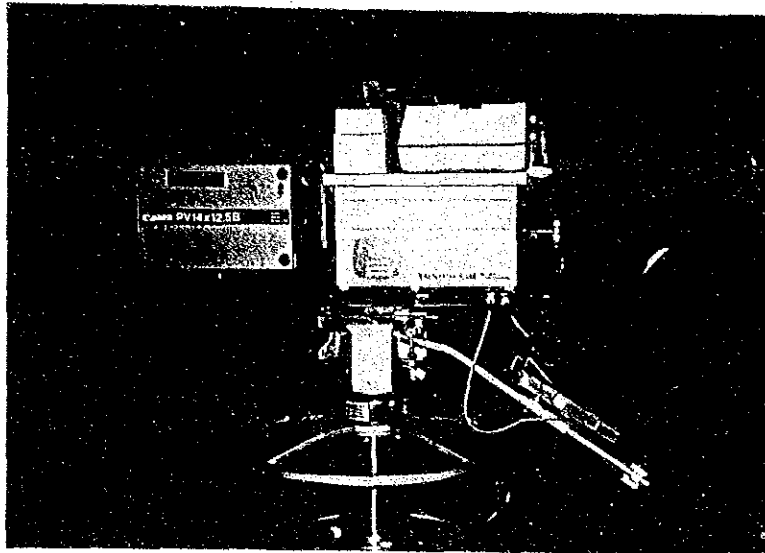
照明器具釣り下げ状況



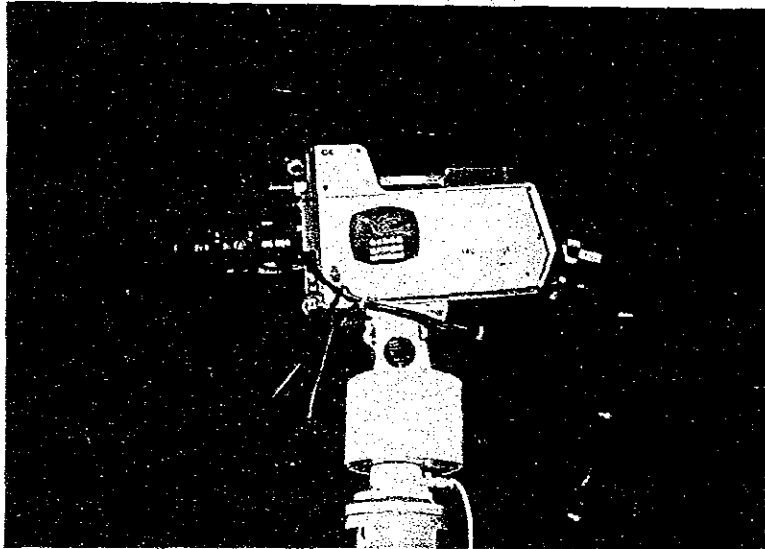
電動ボタン操作盤



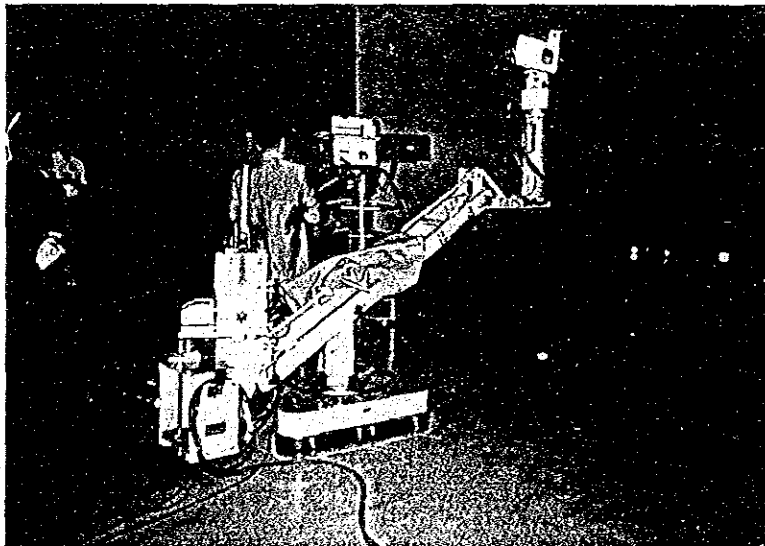
カメラ (東芝整 3 P)



カメラ (NEC 整 3 P  
ハンデーカーメラ)



ミニクレーン

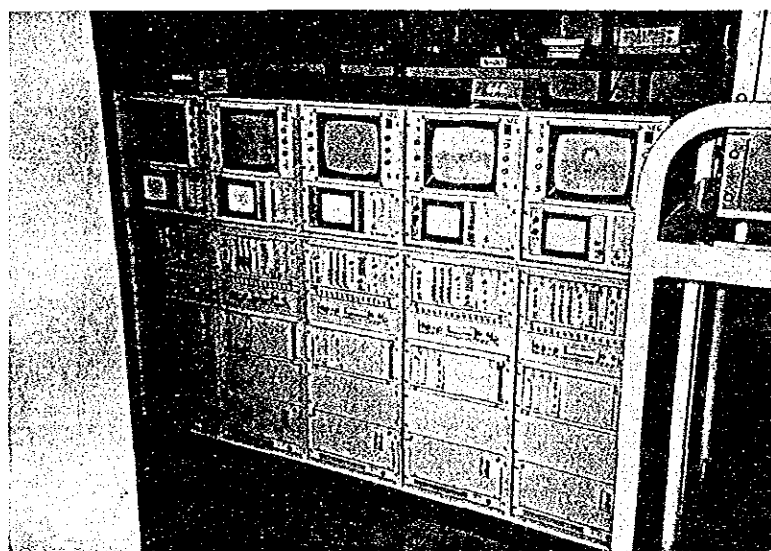




マスターコントロールルーム



主調整卓

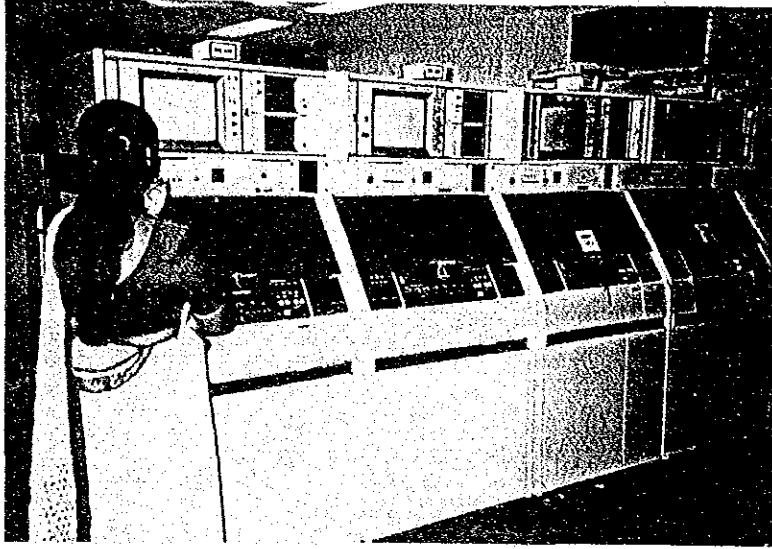


第一、第二スタジオカメラCCU

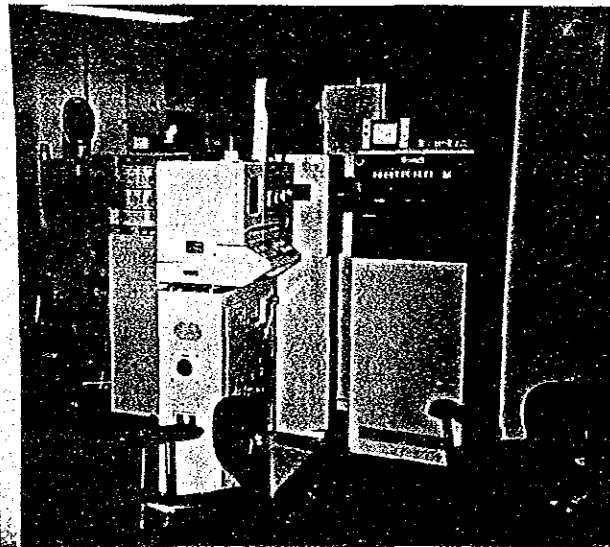
マスターコントロールルームにはこれらの装置の他方式変換装置も装備されている。







アンペックス整1インチVTR



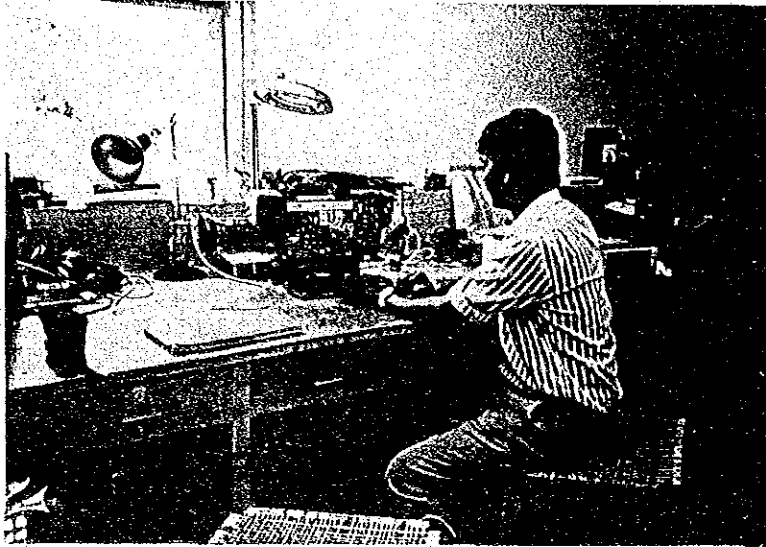
テレシネ装置



メンテナンスルーム

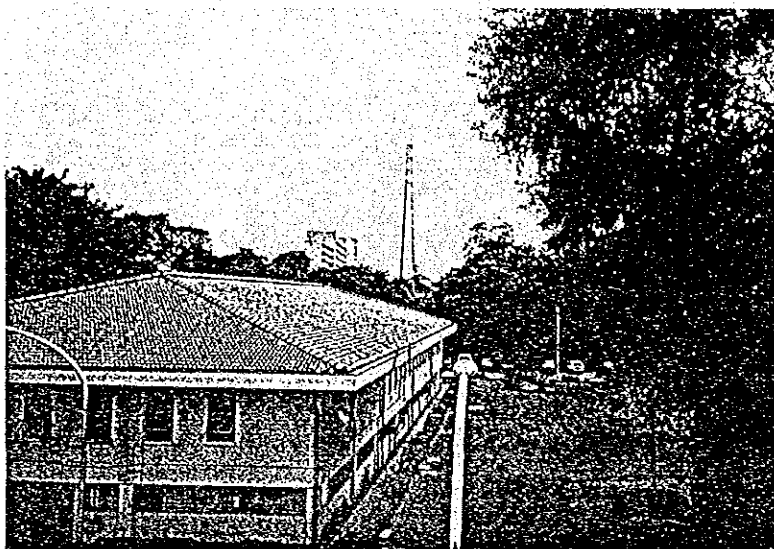








スリランカ放送協会 (SLBC)

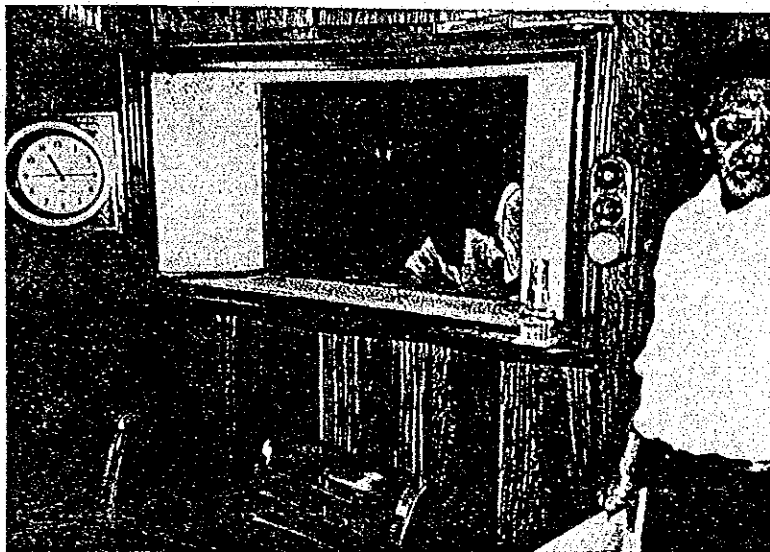


SLRC 側から見た SLBC  
中央鉄塔下に見える建物が SLBC

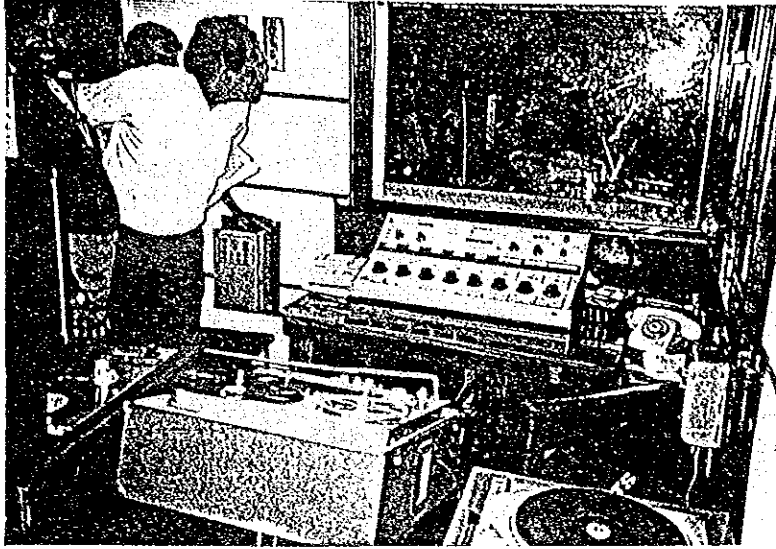




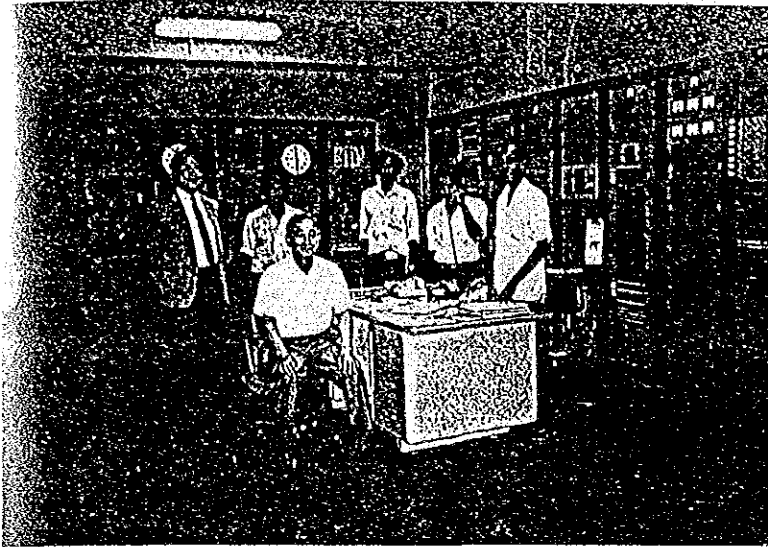
ラジオスタジオ，副調整室



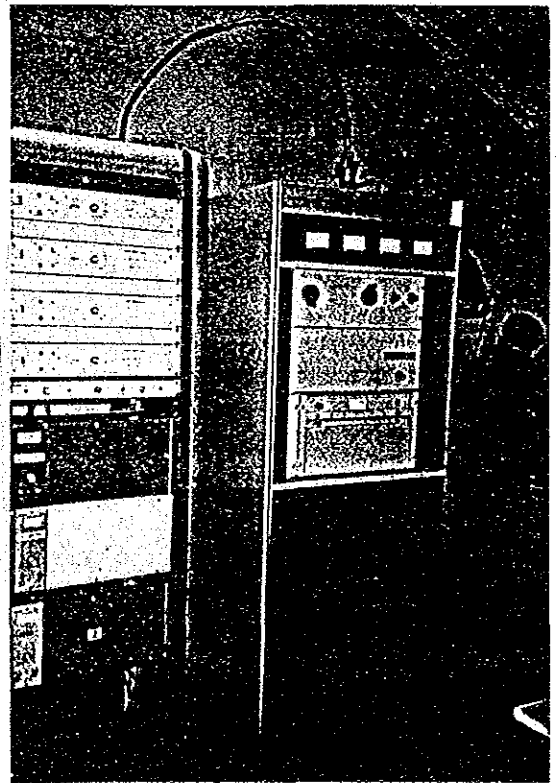
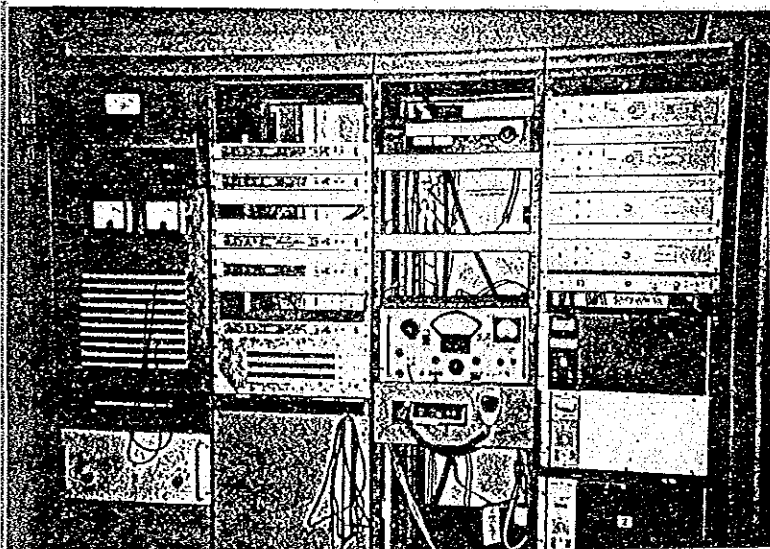






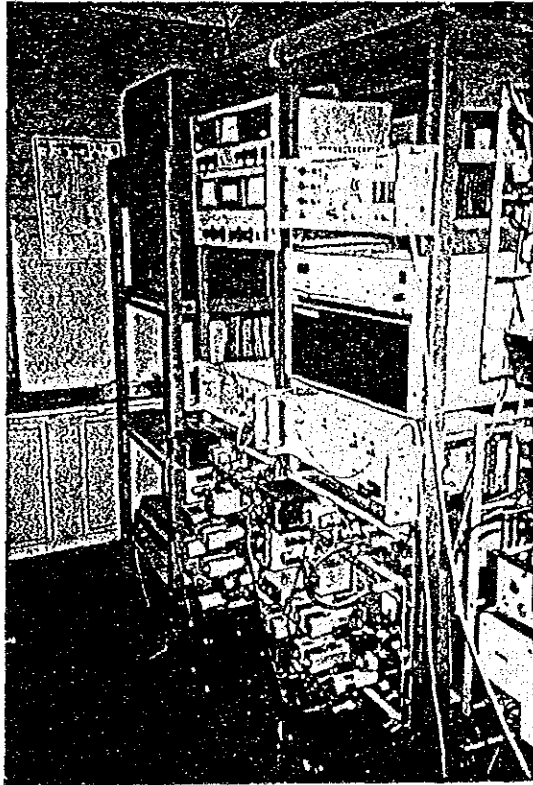
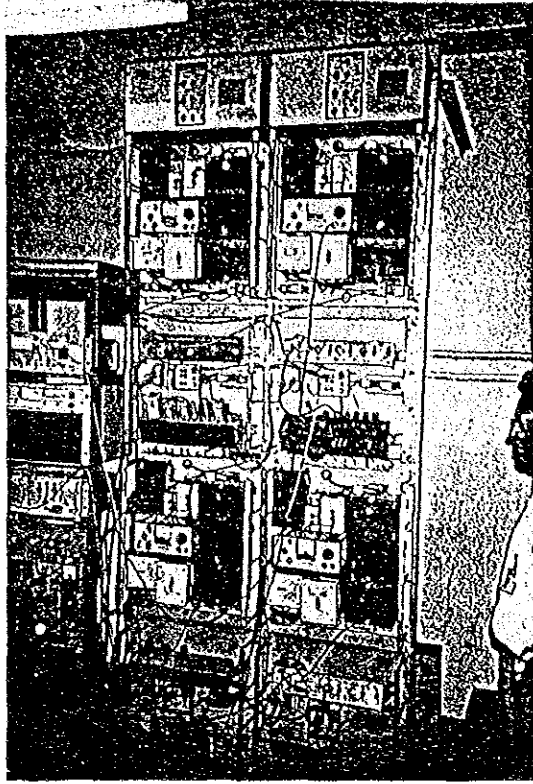


マスターコントロールルーム



FM 放送機



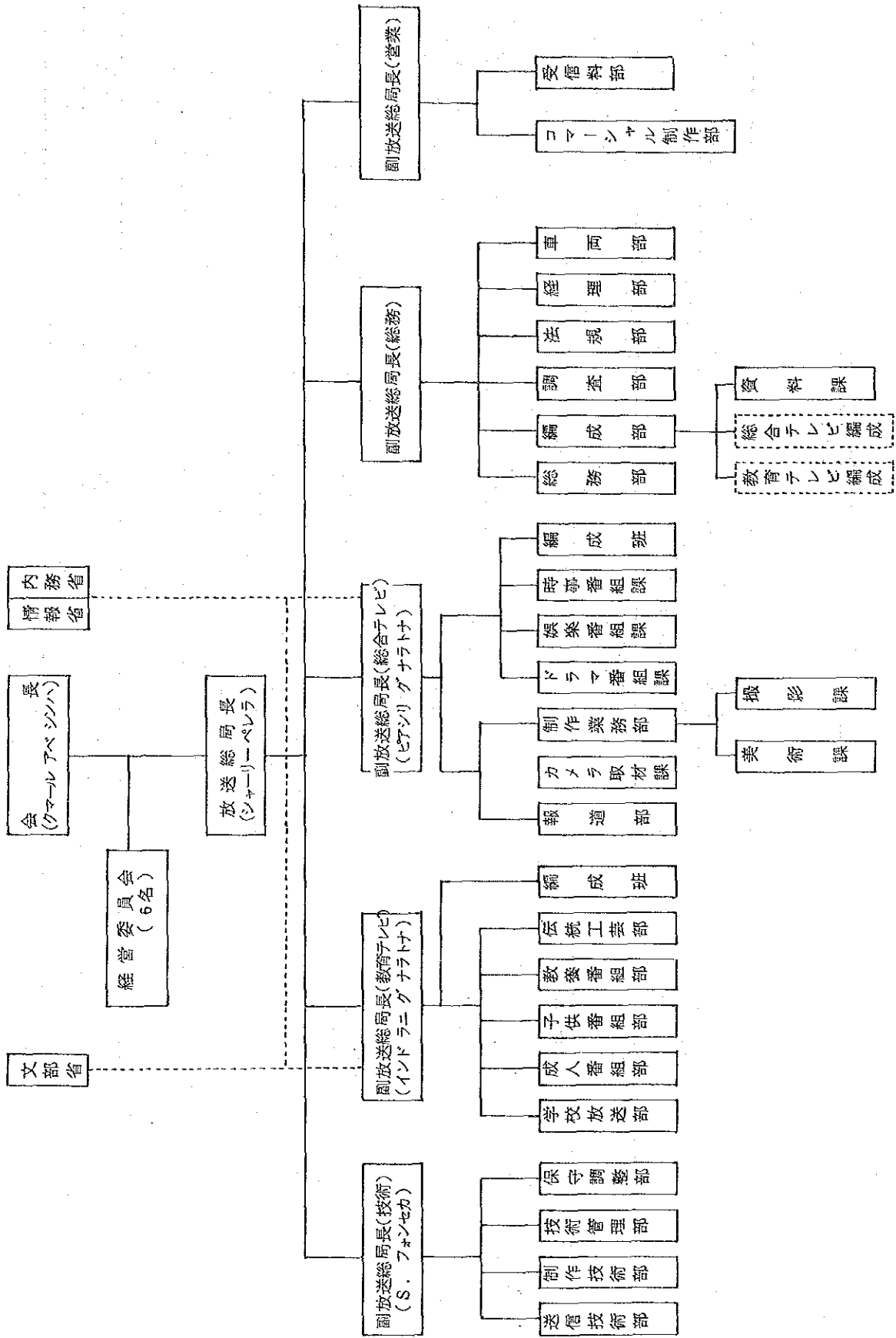


真空管式ラジオ STL など





スリランカ・テレビ放送協会 (Sri Lanka Rupavahini Corporation - SLRC) 組織図  
 ( 国営テレビ局 )



SRI LANKA RUPAVAHINI PROGRAMME SCHEDULE 4TH QUARTER 1988  
 スリランカ ルパバニTV 総合番組表 (1988年最終4半期)

時刻	曜日	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
3:30	ドラマ (英) シリーズ Iraha Handana Part (88.8.28-11.20)	ニュース (シンハラ)	ニュース (シンハラ)	ニュース (シンハラ)	ニュース (シンハラ)	ニュース (シンハラ)	ニュース (シンハラ)
4:00	Wonderful World of Disney (朝来まで)	ニュース (シンハラ)	Shazam (アニメシリーズ 英語)	Archie Sabrina (アニメシリーズ 英語)	Memories of Fairy God Mother (アニメシリーズ 英語)	The New Soronoo (アニメシリーズ 英語)	Siriney Asiriba (身体の仕組み・教)
5:00	今週の出来事	ニュース (シンハラ)	Sports Basketball Tournament	1.3. Sonda Ranga (子供ドラマシンハラ) 2.4. Tadii Story	NHK Science Program 1. Tikiri 2. Open University Program 3. Quiz Program	The Great Space Coaster (宇宙向け科学 英語)	Towards 2000 (ドキュメンタリー 英語)
5:05	1. Salva Neethi (宗教番組) 2. Abhaya 3. Christian / Catholic 4. Yelan Pirai	Grimes Fairy Tales Dungeons & Dragons (子供向け)	Piya Sataba (歌謡)	Athwela (青少年)	1. Oli Arasa (7:30) 2. Ilayar Aranganam (7:45) 3. Tamil Documentary (子ども向け番組) 4. Ilayar Aranganam	1.3. Sinduli Binduli 2.3. Lena Parath (子ども向け番組)	Muppet Show (子ども向け 英)
6:00	1.3. week Story Page 2.4. week Mithuhara (歌)	1. Lasa Prasavagaya 2. Udra 3. Mithuhara Prasavagaya (子ども向け)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)
6:30	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)	ニュース (タミル語)
6:55	1. Vasanta Sonaya (短歌) 2. Nandana vandana 3. Oli Oli 4. Ayurveda (英語)	1. Oli Oli 2. Uthaya Gitam 3. Oli Oli 4. Kodambari (7:45)	Kaloli Aranganam (7:30 7:45)	1. Tamil Documentary (宗教) 2. Agricultural 3. Sava Ranga 4. Gitavanni	1. Hari Padmalai (7:45) Cookery (料理)	Manno Kalanganal (7:30 番組)	Kun Fu (TV 映画) (7:45 7:55)
7:25	1. Tamil Film Songs 2. Nandana (音楽 7:45) 3. Tamil Songs 4. Shinghala Songs	劇場ドラマ	1. Senevi (政府広報) 2. Siri Vimana 3. Ru Sara 4. Rasesa Dabara	Knight Rider (英)	World Sports Special (英)	1. Uruvaya 2. Nethusara 3. Prabhilaba 4. Nethusara (7:45 音楽)	(同上)
8:00	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)	ニュース (シンハラ語)
8:30	1. Live Studio 3 (短歌) 2. Alhura Palessa (音楽) 3. Savasagita (音楽) 4. Puppet Show (7:45)	Youth Program (7:45) First Aid (英語)	Ranmasu Uvaya (10.25) Yaranga (1.03) (TV 7:45 7:55)	Diapothan (7:45 映画組)	1. Haza Salakun (TV 7:45 7:55) 2. World Sports Special (英)	Loku Alva (TV 7:45 7:55)	Ganawa (TV 7:45 7:55)
9:00	ニュース (英語)	ニュース (英語)	ニュース (英語)	ニュース (英語)	ニュース (英語)	ニュース (英語)	ニュース (英語)
9:25	The World of Future Love Boat	1. Music Maker 2. Musical Years 3. Caribbean Night 4. Musical Years	Sampath Rekha (7:45)	Diapothan (7:45 映画組)	Cosby Show (音楽 英語)	Lathery (7:45) 1.2.3. Bate Line 4. World Report	1. 科学番組 2. 7:45 3. Robindra Gi 4. Abata Kanata
9:30	Sarathangala (長崎放送音楽)	Sullivans	Dynasty (7:45 英語)	Midnight Film Theatre Strange Affairs (英語)	Mystery Theatre (TV 7:45 英語)	1. Shinghala Film 2. Soviet Film 3. Tamil Film 4. Soviet Film	Hatt Hele
10:30	Love Boat	(閉鎖)	Close Down	(閉鎖)	Sports Program Close Down	(閉鎖)	North & South (11:45 英語)
11:50	Close Down	Close Down	Close Down	Close Down	Close Down	Close Down	Close Down

学校放送番組放送表

	月	火	水	木	金
10:00   10:20	Zoology (シンハラ語)	Zoology (タミル語)	Chemistry (シンハラ語)	Chemistry (タミル語)	Zoology <sup>(再)</sup> (シンハラ語)
10:25   10:40	English Follow me (シンハラ語)	English Follow me (タミル語)	English Sablina Project (シンハラ語)	English Sablina Project (タミル語)	English <sup>(再)</sup> Follow me (シンハラ語)
10:45   11:05	Physics (シンハラ語)	Physics (タミル語)	Botany (シンハラ語)	Botany (タミル語)	Physics (シンハラ, タミル各週再放)
11:10   11:25	ニュース (前日の再放) (シンハラ語)	ニュース (前日の再放) (タミル語)	ニュース (前日の再放) (英語)	ニュース (前日の再放) (英語)	学級の話 各国の教育, 音楽 ドキュメンタリ
11:30   11:50	Applied Math. (シンハラ語)	Applied Math. (タミル語)	Pure Math. (シンハラ語)	Pure Math. (タミル語)	ditto.

対象は高校3年生(12年生)大学進学生のみ(理科)

同一内容の番組をシンハラ語とタミル語で制作放送している。

授業時間は8:30~12:30

小中学生向けの放送を計画中, そのためにはもう一つのチャンネルを新設する必要がある。

## VIII アンケートについて

セミナー参加者約30名の内17名の参加者が下記の如く回答をした。

- A. セミナーに参加する前から当セミナーの目的を知っていたか。
- : 全く知らなかった (1)
  - : 多少知っていた (11)
  - : 十分に知っていた (5)
- B. セミナーの期間について
- : 長すぎる (0)
  - : 適正である (7)
  - : 短かすぎる (10)
- C. セミナーの水準について
- : 低すぎる (2)
  - : 適正である (15)
  - : 高すぎる (0)
- D. 最も有用で興味がある演題について
- : 日本の放送行政の現状と課題 (3)
  - : コミュニケーションの手段としての教育テレビ番組制作 (8)
  - : 日本NHKの放送技術の現状と動向 (6)
- E. 将来この様なセミナーがスリランカで開催されるとしたら希望する演題は今回と同じか又は別の演題か。
- : 同じ演題 (3)
  - : 別の演題 (11)

無回答3名、別の演題として世界の教育テレビの最近の発展、テレビ文化研究、予算、放送に係る人的資源の有効活用、スリランカに適した低コストスタジオと制作施設の計画、保守、在庫管理と予備部品管理、日本の商業放送、カラーテレビ技術、技術管理、テレビ子供番組開発等が希望された。

F. セミナーの全般的評価について

- : 非常に良かった (16)
- : よかった (1)

視聴覚機材が使用されたので講演及び討論を十分に理解することが出来た、日本の放送管理方法を通じて放送管理の知識を得る良い機会であったという印象が大多数の参加者から表明された。

#### G. その他提案

- : テレビドラマ“おしん”の全てを放映する予定なので“おしん”に関するセミナーを希望する (1)
- : 各種分野の短期セミナーを時々実施して欲しい (2)
- : 視聴覚教材をもっと多く使用して詳細な情報を与えて欲しい (1)
- : セミナーの期間を延長してより詳細説明をして欲しい (1)
- : もっと実際的で分析的な実習を参加者に課する (1)
- : スリランカでは管理者はテレビとラジオ双方の問題点とその解決方法を理解しているべきであり、テレビとラジオの管理者は一堂に会して10日間位のセミナーに参加すべきだ (1)
- : 今回の様なセミナーは先進国でも開催して欲しい (1)
- : 技術と制作を主体としたセミナーを日本で開催して欲しい (1)
- : 最新の知識を元研修員に与えるためにこの種のセミナーは4年又は5年毎に開催されるべきだ (1)
- : 今回の如きセミナーをスリランカで毎年開催して欲しい (2)
- : テレビ放送技術と新しいメディアに関する詳細な講義を含めて欲しい (1)
- : 国営テレビ局の現状について十分な研究を行い事実に基づいたセミナーを行う (1)
- : 日本は現在世界の18地域で21ヶ国語で放送を行っているがシンハラ語は使用されていない、日本とスリランカの間の文化、教育、商業的結合及び友好関係を促進するためにシンハラ語でも放送を開始して欲しい (1)
- : 無回答 (2)

#### H. 帰国研修員に対する設問

元研修員11名が下記の如く回答した。

(1) Mr. Pathirage Dan Piyasiri Gunaratna

49才

1986年にカウンターパート研修参加

国営テレビ局総局次長(一般番組担当)

- : 設問1 日本での研修でどの様な成果があったか —  
テレビ放送番組の広い知識を得た

- ：設問 2 日本での研修の主目的としてなにを提言するか  
 研修員の専門知識の向上と日本との友好関係の増進
- ：設問 3 研修した諸課題が、現在の仕事に活用されている度合  
 無回答
- ：設問 4 研修方法として最優先するのは (1) (講義), (2) (討論又は実習), (3) (研修旅行  
 と見学) の内いずれか  
 全 部
- ：設問 5 研修コースに関する提言  
 無回答
- ：設問 6 JICA のフォローアップ事業に関する希望  
 無回答

(2) Mr. Wad Perera

41 才

1987 年にテレビ放送管理コース参加

国営テレビ局技術者

電力, 空調, スタジオ照明担当技師として局の電力と空調管理に全責任があり, 電力配分, 空調システム, スタジオ照明, 緊急発電施設の運営, 修理, 保守にも従事している。

：設問 1 について — 各種の新しいテレビ機材及びテレビ技術と管理の知識と経験を得た。

：設問 2 について 無回答

- ：設問 3 について
1. Outline of Broadcasting in Japan
  2. Management of NHK
  3. Outline in Commercial Broadcasting in Japan
  4. Tendency of Broadcasting Engineering
  5. Broadcasting and Public opinion Research
  6. Broadcasting Standard of Commercials
  7. Programming of NHK
  8. NHK's Educational TV Programs
  9. Management of Radio Frequency
  10. NHK's News Reporting
  11. News Exchange by Satellite
  12. NHK's Overseas Broadcasting

13. Staff Training system in NHK
14. Recent Development in Broadcasting Engineering

以上全部 (B)

15. CATV in Japan
16. Programming of Commercial Broadcasting
17. Program Production in Commercial Broadcasting
18. Business Management of Commercial Broadcasting
19. Broadcasting Advertisement
20. Role of Consultant Activities in Broadcasting Field

以上全部 (C)

- : 設問 4 について (討論又は実習) 及び (研修旅行と見学)
- : 設問 5 について 無回答
- : 設問 6 について 電力, 空調, ディーゼル発電, スタジオ照明関係機材の保守と修理

(3) Mr. Sonny Premasiri Jayasundara

53 才

1983 年にカラーテレビ技術基礎コース参加

国营テレビ局職員

局外放送班担当者として中継放送用バスを使用した生放送と録画の技術調整の任務に従事。上級技術者として局外放送に 5 年間従事。

- : 設問 1 について テレビカメラ, VTR 等の割当時間は短かったが, 制作実習はスリランカで仕事を行うのに非常に役立った。
- : 設問 2 について 無回答
- : 設問 3 について
  1. TV Camera (A)
  2. TV Standards (A)
  3. VTR (B)
  4. TV Receiver (B)
  5. TV Transmitter (B)
- : 設問 4 について (討論又は実習)
- : 設問 5 について 仕事を通しての研修が役立つ
- : 設問 6 について 無回答

(4) Mr. Shanthikamara de Fonseka

47才

1986年にカウンターパート研修に参加

国営テレビ局総局次長（技術担当）

技師長として技術部の運営に従事

1986年より技術課長

1988年より総局次長

- : 設問 1 について (1) 新しい技術に関する知識の向上  
(2) 組織と新しいプロジェクトの企画  
(3) テレビ機材の機能改善
- : 設問 2 について 関係者の下に上級研修を受け知識の向上
- : 設問 3 について 1. Factory Training (A)  
2. Training at NHK (A)  
3. Training at All Japan TV (A)
- : 設問 4 について (講義) 及び (討論又は実習)
- : 設問 5 について 無回答
- : 設問 6 について 上級研修希望

(5) Mr. S. K. Gamini Somanasena

39才

1983年に教育テレビ番組基礎コースに参加

国営テレビ局プロデューサー

教育番組の企画、調査及び制作に従事

1982年よりプロデューサー (grade VI)

1987年よりプロデューサー (grade V)

- : 設問 1 について (1) 日本の学校向け放送に関する知識の向上  
(2) 教育テレビ番組の企画と制作  
(3) 日本人に関する知識の向上
- : 設問 2 について 教育番組を制作し利用する知識と技術の向上
- : 設問 3 について 1. Programme idea development (A)  
2. Scripting (A)  
3. Sound effects (A)  
4. Editing (VCR) (A)



- 5. Video Animation (B)
- 6. Puppeting (B)
- 7. Silhouette Technique (B)
- 8. Camera handling (B)
- 9. Utilisation of ETV Programme (B)
- 10. Film animation (C)

- : 設問 4 について (討論又は実習)
- : 設問 5 について 研修期間が短い, 研修員は上級コース研修に継続して参加出来るようにすべきである。
- : 設問 6 について “ルックジャパン”, “砧”, “研修員”等の出版物が欲しい。

(6) Mr. Liyanage Don Dayawansa

42 才

1984 年に教育テレビ番組(1)コース参加  
 国营テレビ局プロデューサー

- 1. 教育テレビ番組の企画, 制作, 放送
- 2. テレビ番組広報用資料作成
- 3. テレビ文化調査
- 4. 幼児向け番組制作

以上の諸業務に従事

1984 年よりプロデューサー (grade VI)

1987 年より上級プロデューサー (grade V)

- : 設問 1 について 日本での研修を通して多くの放送経験を得た。  
 日本人研修担当者と日本社会から放送技術を習得した。放送専門家になるのに役立った。
- : 設問 2 について (1) 日本人の放送技術と経験の移転  
 (2) テレビ番組の企画, 制作の如き放送関係業務の知識を移転して日本文化社会の紹介  
 (3) 他の研修員の放送経験の紹介  
 (4) 経験的学習方法による放送技術の向上  
 (5) 放送管理技術の向上
- : 設問 3 について 1. Programme idea development (A)  
 2. Scripting (A)

- 3. Video animation (A)
- 4. Story development (A)
- 5. Editing (A)
- 6. Framing (A)
- 7. Sound effects (A)
- 8. Computer graphics (A)
- 9. Film animation (B)
- 10. Camera work (B)
- 11. Puppetry (B)
- 12. Silhouette (C)

: 設問 4 について (研修旅行及び見学)

: 設問 5 について 無 回 答

: 設問 6 について JICA の海外活動に関する資料を送付して欲しい。私は文化、教育、放送、技術等の日本事情に関するシリーズ番組を制作する責任がある。

(7) Mr. V. A. Thirugnanasuntharam

50 才

1981 年に放送管理セミナーに参加

スリランカ放送協会タミール語番組主任

タミール語番組企画、制作、放送に従事

1983 年よりタミール語番組副主任

1984 年よりタミール語番組主任

: 設問 1 について 海外の放送関係者と連絡することが出来た。

: 設問 2 について 第三世界諸国が必要としている放送技術と番組を検討し、それに基づき主目的が設定されるべきだ。

- : 設問 3 について
- 1. Management of Commercial broadcasters (A)
  - 2. Problems related to expansion of broadcasting (A)  
networks in developing countries (management, staff training)
  - 3. Present situation of broadcasting (B)  
administration in Japan
  - 4. The management and long range planning of NHK (B)
  - 5. Utilization of broadcasting programmes in education (B)

6. Role of consultant (B)
7. Problems related to expansion of broadcasting networks in developing countries (B)  
( facilities maintenance & operation, engineering )
8. Broadcasting satellite in Japan (C)
9. Engineering activities in NHK (C)
- : 設問 4 について ( 討論又は実習 )
- : 設問 5 について 無 回 答
- : 設問 6 について 研修で得た成果はフォローアップによってのみ有効に評価される。新人に研修機会を与える一方で、再研修により元研修員の既得の知識を補強することも重要だ。フォローアップする対象者は JICA 又は NHK が選ぶべきであろう。
- (8) Mr. Fernando W. S. E.  
44 才  
1981 年にカラーテレビ技術基礎コース参加  
Independent Television Network 技師  
スタジオ、制作、送信用主調整室業務の技術面及び視聴覚機材やスタジオ施設を発注確保することと地方局拡張業務の補佐に従事
- : 設問 1 について 日本で研修参加した経験者として ITN に配属された時に、当時民間機関であった ITN は情報省に移管された。上級職員が 2 名しかいなかったの  
で新しい建物と施設（主にスタジオ関係）の計画は私が従事した。  
私が日本で参加した非常に有益な研修と日本から受け取った国营テレビ  
局のサーキットダイアグラムと平面図は ITN の施設設置について技術面  
で大いに役立った。
- : 設問 2 について 基礎研修に重点をおく。機器操作や地方局視察を行う。私が日本で学ん  
だ文化、習慣、勤勉な日本人を紹介する。新しい技術や施設をもっと多  
く紹介する。
- : 設問 3 について
1. Camera operation (A)
  2. V. T. R. (A)
  3. Telecine (A)
  4. Vision mixing (A)
  5. Portable microwave links (operation) (B)

6. Theory of transmitter (B)

- : 設問 4 について (講義)
- : 設問 5 について 初心者にとって研修コースは理想的であった。
- : 設問 6 について 私が日本で参加した研修と同じ分野のフォローアップが私や ITN にとって有益だ。ITN の拡張計画は農村社会を対象にしており、我々が現在 ITN で使用しているテレビ機材の大部分は日本製であり、日本は進歩した国であるから JICA が ITN に技術研修と機材供与を実施することを希望する。

(9) Mr. Dhanapala Hettiarachchi

42 才

1982 年にカラーテレビ技術基礎コース参加

国营テレビ局主調整室主任

1982 年より技術職

1985 年より現職

- : 設問 1 について スリランカは 1982 年にテレビ放送を開始したが、私は日本が経験した進歩した放送技術に短期間で追いつく機会を得た。
- : 設問 2 について 日本は放送に長年の経験を有し、知識と能力を他の国々に供与してきたので、我々は日本での研修で最大の成果を得ることが出来た。
- : 設問 3 について
1. Camera tube (A)
  2. Television standards (A)
  3. Digital television (A)
  4. T. V. measurement technique (A)
  5. T. V. transmission (B)
  6. Lighting (C)
- : 設問 4 について (討論又は実習)
- : 設問 5 について 無回答
- : 設問 6 について 進歩した技術に関する公開討論会を含む技術者向けフォローアップコースを希望する。

(10) Mr. Perera Jerry Randolph

42才

1985年にカラーテレビ技術上級コース参加

国営テレビ局スタジオ制作担当

スタジオ制作を監督したり、企画会議にも出席する、スタジオ機材が正常に機能しているか、スタジオ運営がスムーズに行われているか確認する。

1985年より上級技術者

1988年よりスタジオ制作担当

- : 設問1について 現在使用中のスタジオ機材に関する技術的综合研修
- : 設問2について 我々が制作に使用する機材について自信がもてるようにする。
- : 設問3について
1. Color camera (A)
  2. V. T. R. (A)
  3. Production (A)
- : 設問4について (討論又は実習)
- : 設問5について 討議した主題がスタジオ内外の制作に従事する各担当との関連で国営テレビ局に実際に役立つかどうかJICAが事前に検討する必要がある。
- : 設問6について 帰国研修員に対する再研修や研修指導者研修コースは長期間にみて非常に有益である。

(11) Mr. Ranhotiege Piyadara Ratirasinghe

46才

1981年に教育番組制作コース参加

1985年にテレビ放送管理コース参加

国営テレビ局一般番組課長補佐

番組企画及び制作に従事

1981年より教育番組プロデューサー

1983年より現職

- : 設問1について スリランカでテレビ放送が開始される前に、私は1981年に教育テレビ制作者として日本で研修を受け、教育テレビ制作者になるのに大いに役立った。
- 1985年にテレビ放送管理コースに参加して日本式テレビ放送管理を確認したり、意見交換をすることが出来たので有益であった。
- : 設問2について 日本はテレビ技術、制作、管理面で高い位置に達したので、まだ発展段

階にある他の国々と経験を示しあえば理想的であろう。

：設問 3 について

1. 1981年参加の教育番組制作コースの全題目 (A)

2. 1985年参加のテレビ放送管理コースの全題目 (A)

：設問 4 について

(研修旅行及び見学)

：設問 5 について

個別研修に参加出来れば多くの成果が得られるであろう。

：設問 6 について

JICAのアレンジで研修終了後に他の帰国研修員たちに再度あうことが出来て、研修後に従事している業務についての経験を交換することが出来たら大いに有益であろう。

討議やセミナーの形式を通じてJICA研修の評価をすることも出来るであろう。

## Ⅸ 資 料

1. 参加者名簿
2. アンケート用紙
3. スリランカにおけるテレビ放送の現状
4. 国営テレビに関する新聞記事
5. 講演に使用したテキスト





## 1. 参加者名簿



### Ex-Participants

Mr. J. Wickramasinghe	SLRC
Mr. W. S. E. Fernando	ITN
Mr. S. K. G. Sumanasena	SLRC
Mr. Hartley Fernando	SLRC
Mr. W. A. D. Perera	SLRC
Mr. D. Hettiarachchi	SLRC
Mr. Shirly Perera	SLRC
Mr. D. D. Liyanage	SLRC
Mr. V. A. Thirignanasunthar	SLBC
Mr. J. R. Perera	SLRC
Mr. S. P. Jayasundara	SLRC
Mr. Pinto in place of Mr. Weeramam	SLBC
Mr. R. P. Ratnasিংhe	SLRC

### Non-Participants

Mr. P. N. Meegaswatte	SLRC	
Mr. U. S. Arambewela	SLRC	
Mr. Errol De Silva	Producer News	SLRC
Mr. A. Malimage		ITN
Mr. W. Wickrama	Assist. Dir.	SLRC
Mr. P. Guneratne	Dupety Dir. General	SLRC
Mr. K. Abeyasinghe	Chairman	SLRC
Mr. Sanath Liyanage		SLRC
Mr. B. S. Goonewardene		Retd. Univ. Inst.
Mr. J. P. Pathirana	Director News	SLRC
Dr. Gunesequera	Secretary	Min. of Information
Mr. Y. Kanzaki		Embassy of Japan
Mission Members		
JICA Members		



## 2. アンケート用紙



QUESTIONNAIRE

To help us grasp the effect of the Seminar, will you kindly answer the following questions and return this questionnaire to us at the end of the Seminar.

Thank you for your cooperation!

A. Objective

To what extent were you aware of the objectives of this Seminar before you attended the Seminar. Please put the rating number in the square on the right side of the paper.

<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
not aware	aware	fully	
at all	to some extent	aware	

B. Duration of the Seminar

<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
too long.	just right	too short	

C. Level of the Seminar

<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<input style="width: 40px; height: 30px;" type="text"/>
too low	just right	too high	

D. The Most Useful and Interesting Topic

1. broadcasting administration and its problems in Japan
  2. educational TV programme production as means of communication
  3. present situation and tendency of broadcasting engineering of NHK, Japan
- 

E. In the future if the Seminar as this is to be held in your country, should the seminar cover the similar topic or different topic?  
If different topic is desired, please indicate the desirable topic.

F. General Impression of the Seminar

G. Suggestion (if you have)



H. To Ex-participant in the group training course such as Television Broadcasting Management, Color Television Engineering (fundamental or advanced), Educational Television Programme (fundamental or advanced), Broadcasting Executives' Seminar, and Radio Broadcasting Engineering (Radio Transmitting).

Please fill in the following and reply to the questions. In order to improve the future programme of the course, your frank opinions and suggestions are highly appreciated. (Please write in block letters or typewrite.)

(1) Name (Please underline your surname.)

(2) Date of birth

(3) Home address

(4) Year of participation 19 Course name \_\_\_\_\_

(5) Occupation

a) Your present organization, and official adress

b) Please describe your duties in the present service briefly.

c) Employment record since the year of your participation

Duration of Service	Position (or assignment)	Organization
<p>— Present</p>	<p>Same as (a)</p>	

d). Please draw a chart of the organization (starting from a "division/section" as the lowest level), and indicate your section in an annexed paper.





4. To what do you give a priority as a most preferable means of Training?  
Please check ( ) on the following items.

- (1) ( ) Lecture
- (2) ( ) Discussion or Practice
- (3) ( ) Observation Trip

5. If you have any other suggestion or comment on the course, please mention below briefly.

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

6. Is there any request to follow-up activities of JICA?  
Please mention below briefly.

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---



### 3. スリランカにおけるテレビ放送の現状





## PRESENT SITUATION ON TELEVISION BROADCASTING IN SRI LANKA

by Shirley Perera, Director General  
Sri Lanka Rupavahini Corporation

### General

When one has to talk on the present situation of TV broadcasting in Sri Lanka it becomes necessary to touch on even briefly on the various TV Stations now in operation while concentrating more fully on the one and only island wide channel ie: The Sri Lanka Rupavahini Corporation.

The birth of television in Sri Lanka could be traced back to 1979 when the government of Sri Lanka stepped in to run the Independent Television Network (ITN) which began operations originally as a private company. Its one kilowatt transmitter had an effective radius of about 20 - 25 miles from Colombo. As it stands today ITN continues to serve a more western oriented audience with imported programmes mostly from Great Britain and America. There is a small percentage of local programming as well. The existence of ITN has been welcome by the SLRC administration because an element of competition helps in a big way to keep all concerned wide awake for otherwise the other could get the better of you. In financial terms since both channels depend heavily on commercial revenue it could be disastrous to the TV channel that <sup>is</sup> caught napping. In this context both - Rupavahini and ITN have so far functioned as financially viable organisations placing no burdens on the government.

In 1982 after careful planning the Sri Lanka Rupavahini Corporation was established thanks to the government of Japan. It was an outright gift. Its governing body has seven appointed members with one of its members functioning as Chairman. The Director General functions as the Chief Executive with powers vested in him under part 111 section 9 (1) of the Sri Lanka Rupavahini Act 6 of 1982. As a Corporation it today enjoys greater flexibility and autonomy in operating its television service. At present it disseminates information, education and entertainment on a single channel on VHF band 3. Channels 5,8,9,10 & 11 in three languages, Sinhala, Tamil and English. Today Rupavahini is charged with the responsibility of producing and acquiring a wide and varied range of programmes to cater for a multi-racial, multi-cultural and multi-lingual society as well as to arouse an awareness among the viewers of the vital issues that are affecting the survival and continued prosperity of Sri Lanka.

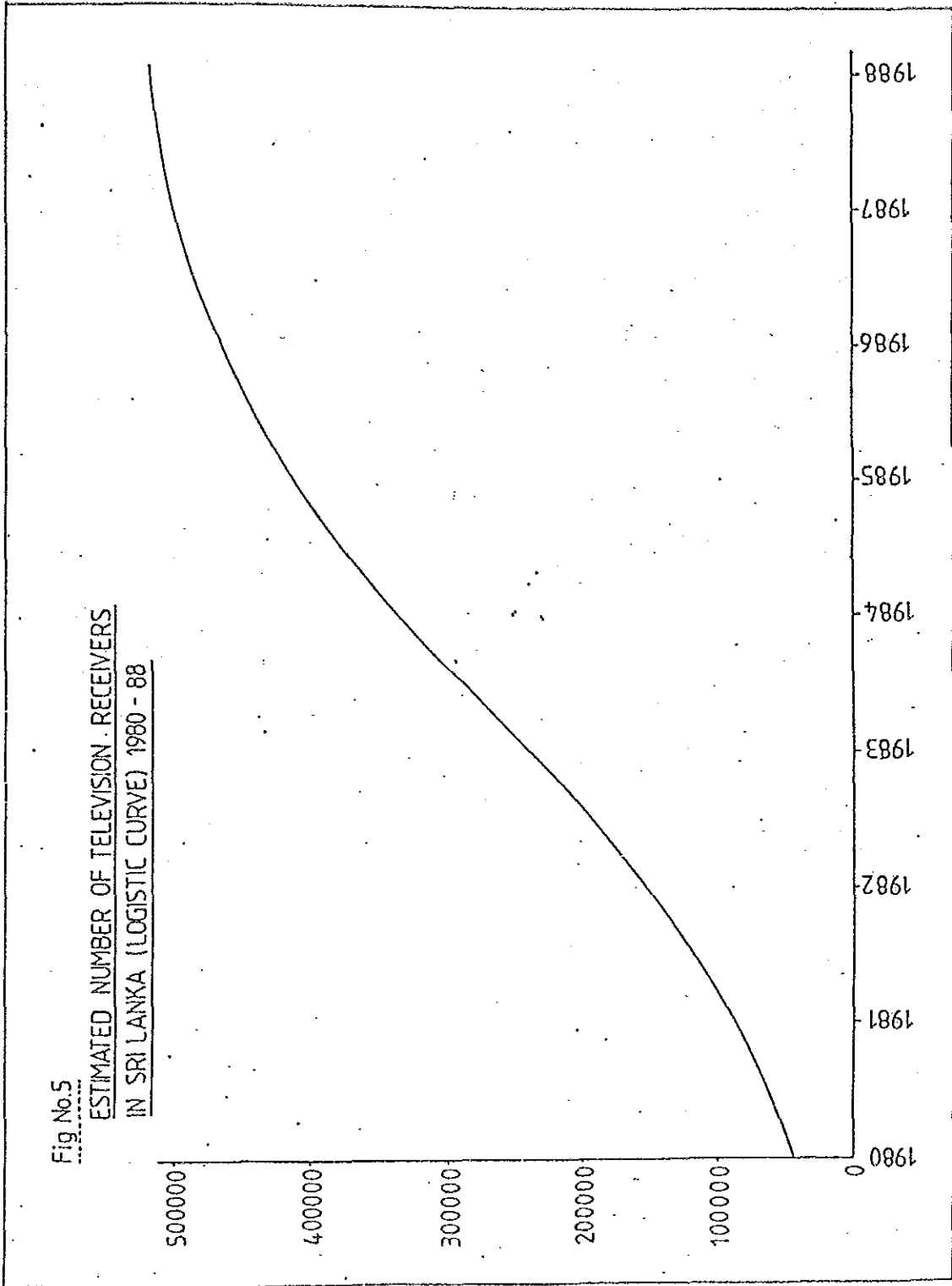
In Sri Lanka's plural society with a population of around 16.5 million, TV viewing is already quite pervasive there being over 500,000 TV sets. (Fig 1) The Sri Lanka Rupavahini Corporation is financed entirely by revenue derived from TV licence fees and commercial advertisements. However 1/5th of the licence fees collected goes to ITN while P & T Department collects 10% as a service charge. The licence fee for operating a monochrome TV set is Rs 150.00 per annum and for colour TV Rs 250.00 per annum. Today television provides a wide range of services from sports to musicals, light entertainment to dramas, economic and political issues to cultural and scientific matters, news and current affairs to formal and non formal education. Hence as a public TV broadcasting organisation, Rupavahini has to produce and acquire not only TV programmes of good entertainment value but also TV programmes which reflect the pace and development in Sri Lanka in a wide variety of areas.

#### Output of Programmes

The present output of general TV programmes average 40 hours per week while formal educational programmes account for 6.5 hours per week. In terms of sources of programmes about 55% are locally produced and 45% are imported. In terms of language distribution Sinhala programmes account for 37%, Tamil 10% and English 53%. A statistical breakdown of locally produced programmes language wise accounts for 65% Sinhala, 17% Tamil and 18% English.

(Fig 1)

Fig No.5  
ESTIMATED NUMBER OF TELEVISION RECEIVERS  
IN SRI LANKA (LOGISTIC CURVE) 1980 - 88

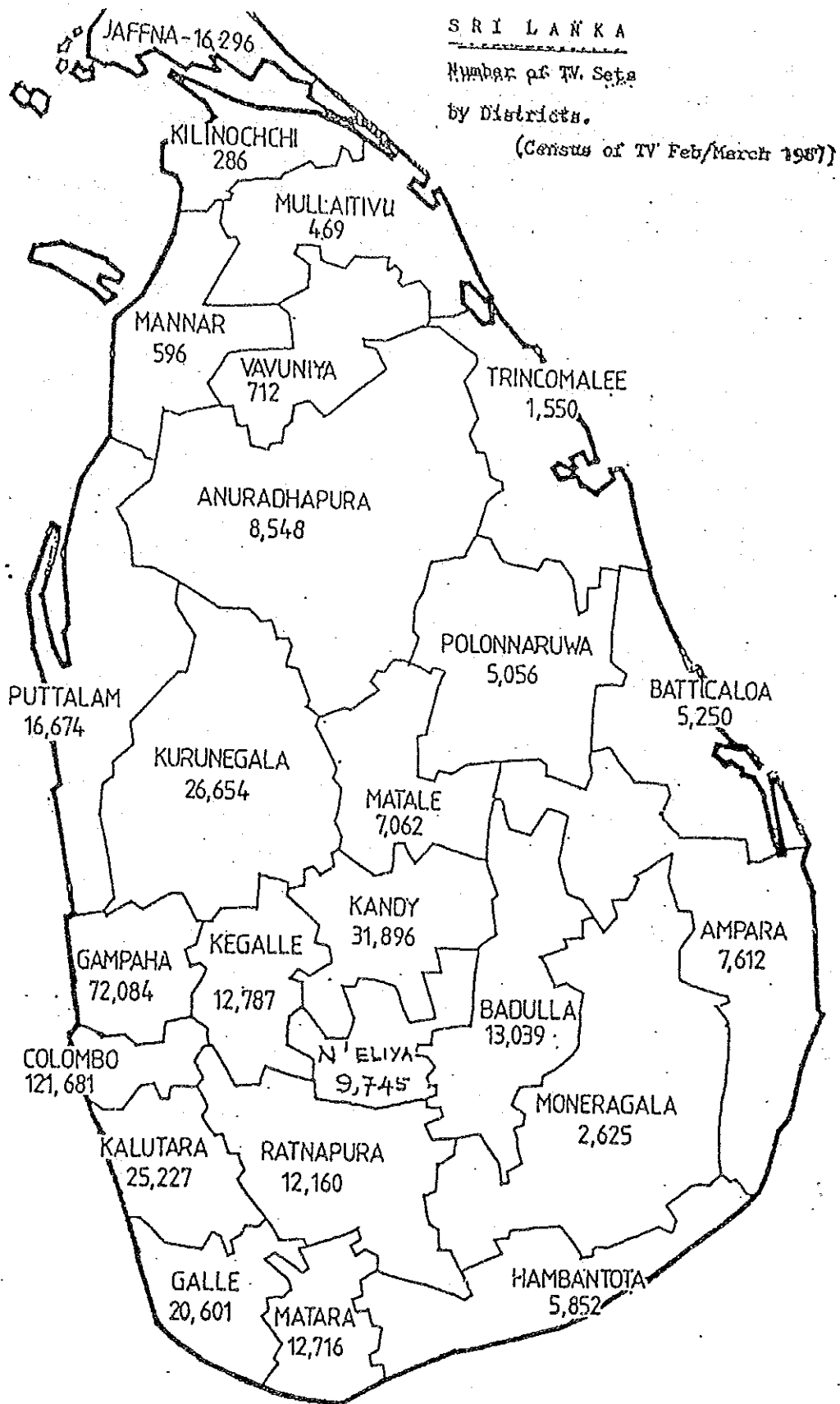


### Rapid growth of TV

At the end of 1979 there were only 2810 licenced TV sets. By the year 1981 this figure had increased to 56,000. In 1982 it rattled everyone who predicted a slow growth for TV when the number of TV sets rose to 200,000. The latest statistics show that there is an estimated half a million TV sets in circulation (Fig 2). This means that 35% of the countries population has access to television broadcasting or in other words every 6th house in Sri Lanka has a TV set. The estimated audience is in the region of five million. 50% of the TV sets are concentrated in the Western Province. The balance is spread out in the rest of the country. The latest figures reveal that there are 38% colour TV sets as against 62% in black and white. 84.5% of the TV sets are worked on electricity while in the rural areas 15.3% are battery operated and 0.1% on solar power.

### Present Preoccupation

Rupavahini's present preoccupation is to increase the proportion of local productions and to maximize the rate of utilisation of its resources. Rupavahini is obliged to increase its local productions and to upgrade its quality as it is only through local production that it can reflect the cultural background, the values and attitudes of the people as well as the pace and tempo of the society it serves. Nevertheless Rupavahini will continue to hire and telecast good quality foreign programmes so as to extend the range and variety of its TV programmes. Because of escalating costs in production and acquisition of TV programmes, Rupavahini has to maximize the use of its resources and increase the efficiency of its operations. Towards this end, it will plan for automation in most of its operations and for the use of computers in the allocation of its human resources. Furthermore it will not hesitate on the acquisition of new techniques if these new technologies or techniques enable programmes to be produced more quickly and economically in the long run.



### Educational TV - The Position Today (Fig 3)

Education was a major consideration when TV was introduced to Sri Lanka. Infact the Japanese aid scheme was conceived mainly around this perspective. At the beginning, the concentration was mainly on formal educational programming to selected viewers, in a selected context. But practical considerations showed that TV could not be confined in this way. 'Education' must necessarily move out of broader areas, - Non Formal Education - in the widest possible context of the term.

Education for instance could not be confined to schools, polytechnics, and universities only. Education is a life long and continuing affair. Educational TV had to match the social and economic lives of the people, meet the challenges of science and technology, and above all education had to combine effectively with entertainment to put the "messages" across effectively.

Therefore in 1988 SLRC made a major change in its administrative stucture by creating a new division for educational broadcasting - incorporating all the units of formal and non formal education, children's, documentary, folk arts and culture. All units which have basic objectives in education either directly or indirectly.

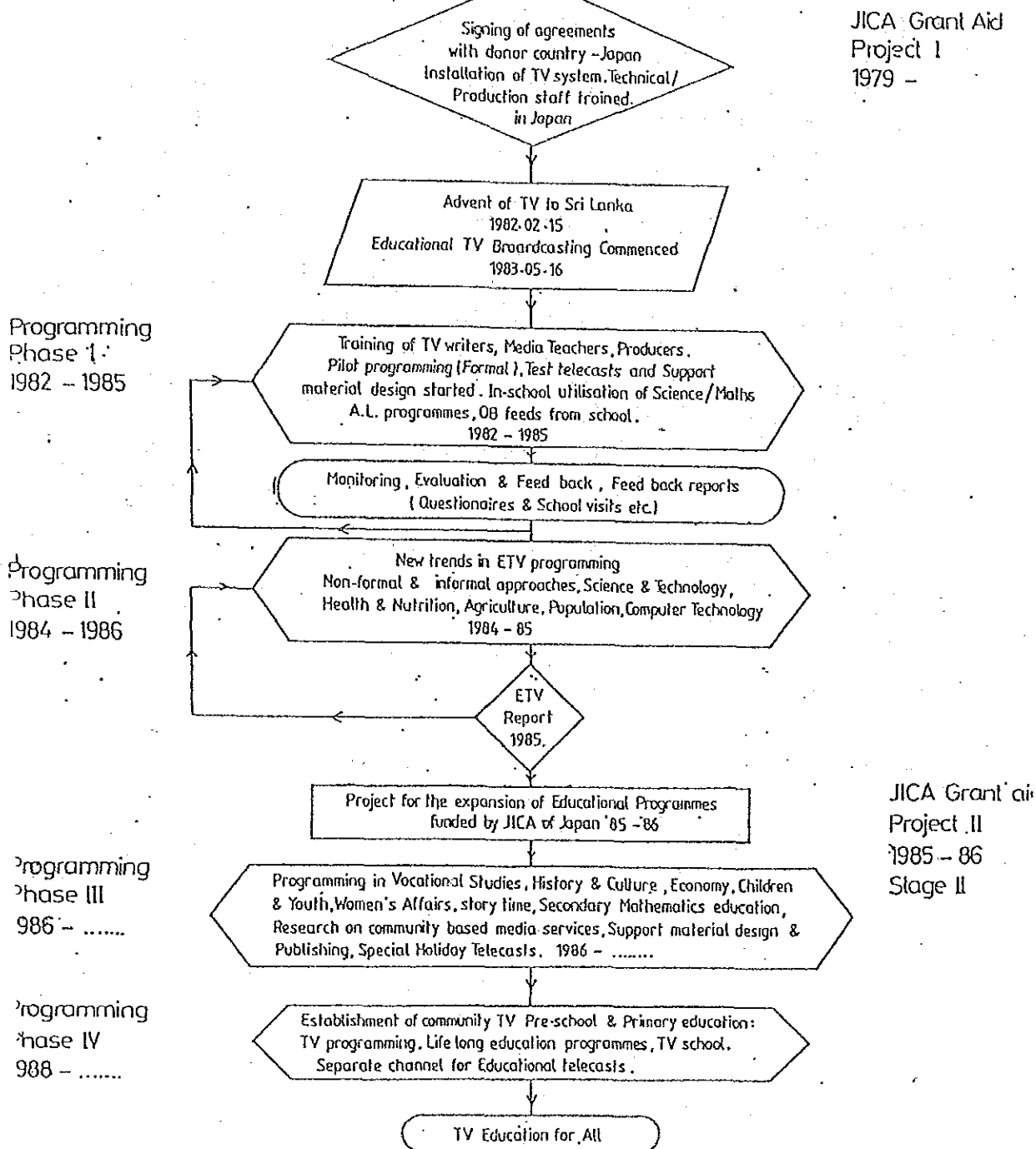
It is in this background that the Division telecasts special educational holiday transmissions in addition to the formal transmissions which it telecasts mainly to schools, catering thus for a wider and miscellaneous clientele of viewers. In 1987 alone the school services contributed 206.2 hours and the holiday service 172 hours of TV time.

At the end of my presentation you will be able to see a short documentary on the growth of educational TV produced by the Educational Programmes Division which is headed by a Deputy Director General.

(PROJECT FLOWCHART)  
HISTORICAL DEVELOPMENT 1982 - 1988

A VISION FOR THE FUTURE THROUGH  
Japanese Co-operation

(Fig 3)



Support Material Based on TV Script by  
Mrs. Indrani Herath Gunaratne, Deputy Director General Education Programmes,  
Sri Lanka Rupavahini Corporation, P.O. Box 2204, Sri Lanka.

Concept and Production by:  
Oaya, D. Liyanage  
Producer - Director SLRC (ETV)

### TV Transmission System in Sri Lanka

Our main transmitter is located on top of Mt. Pidurutalagala. The height of transmitter base is 2425M and the height of mast is 30M. It receive the audio signal and the video signal from Colombo through a Micro wave link. There are two 10 kilowatt transmitters working parallel. This transmission signal covers the South, East, West and North Central parts of Sri Lanka. This station is equipped with a standby generator of 125 KVA. (Fig 4) Fully remote control operation of this station from Colombo is possible through a microwave sub channel and supervisory link. Although theoretical coverage is about 2/3 of Sri Lanka, there are shadow areas in Kandy, Badulla, Ratnapura and Matara. This problem will be overcome by constructing gap filling stations.

In Phase I itself a transposer station was put up to cover the shadow area in Kandy and this has power of 50 watt.

To provide a good signal for the Northern part of Sri Lanka a transmitting station was constructed in the North of Vavunia at Kokavil. Kokavil transmitting station receives its signal from Madukanda situated North of Vavunia. The station at Madukanda receives the signal from Pidurutalagala and is re-directed to Kokavil on microwave link. (Fig 5)

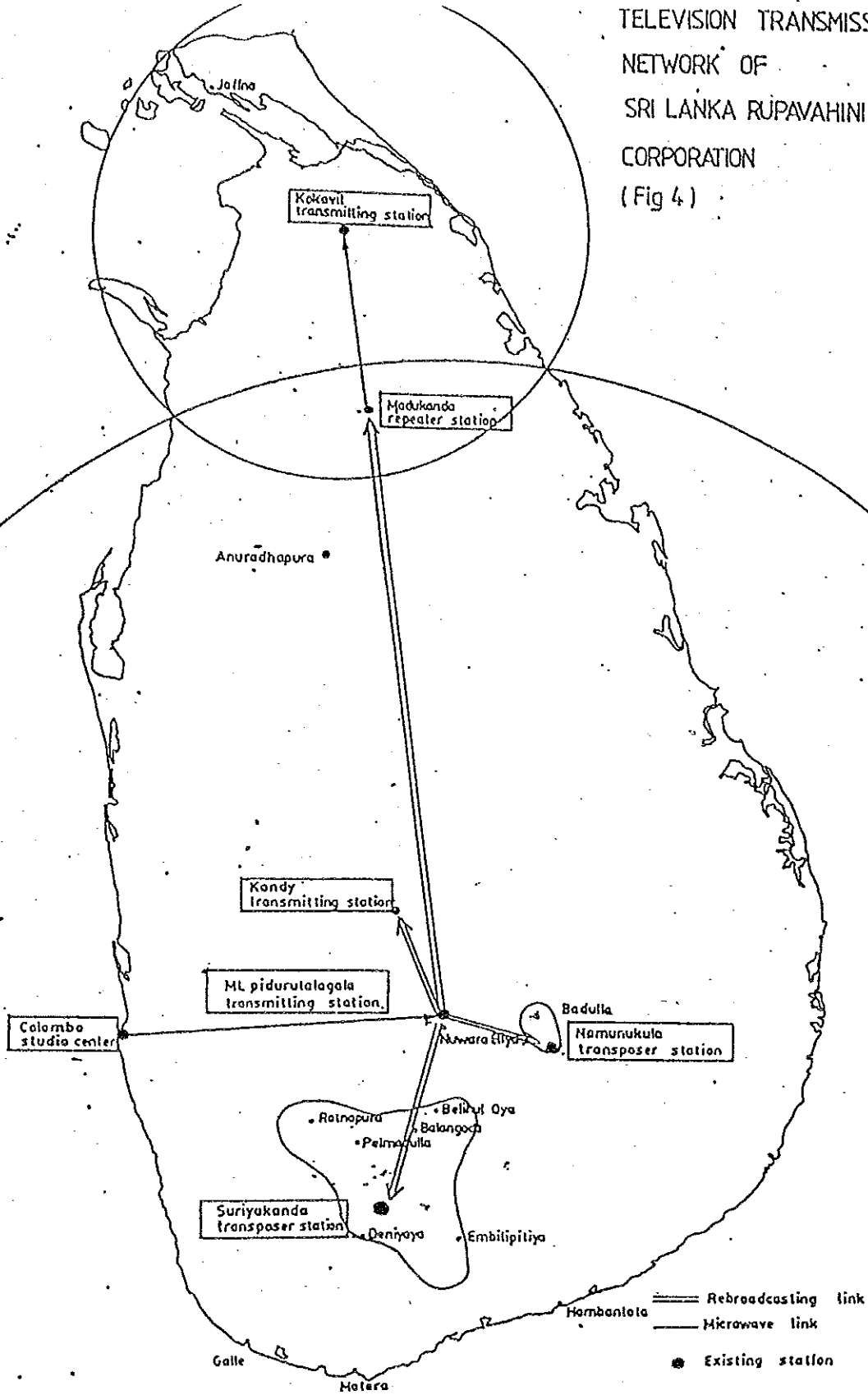
Kokavil too has two 10 kw transmitters feeding an antenna having a gain of about ten. This transmitter covers the entire Northern Region and parts of India.

Under Phase II grant aid project from Japan in 1986, the existing transmission system was augmented by providing gap filling station at Suriyakanda and Namunukula.

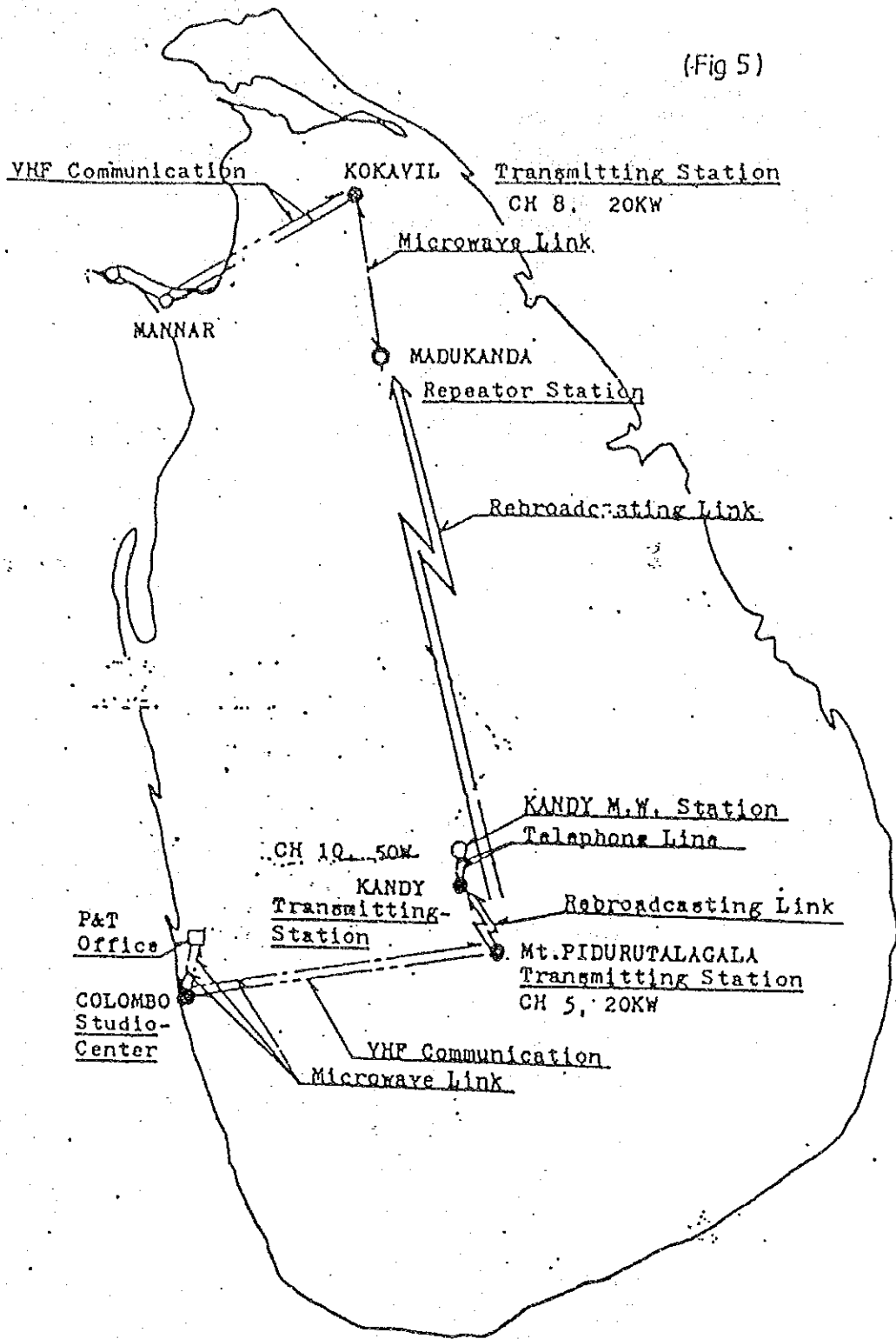
At present, TV caters to over 93% of the population in Sri Lanka. The gap filling will be done in stages depending on the population density.



TELEVISION TRANSMISSION  
 NETWORK OF  
 SRI LANKA RUPAVAHINI  
 CORPORATION  
 ( Fig 4 )



(Fig 5)



PROJECT LOCATION MAP

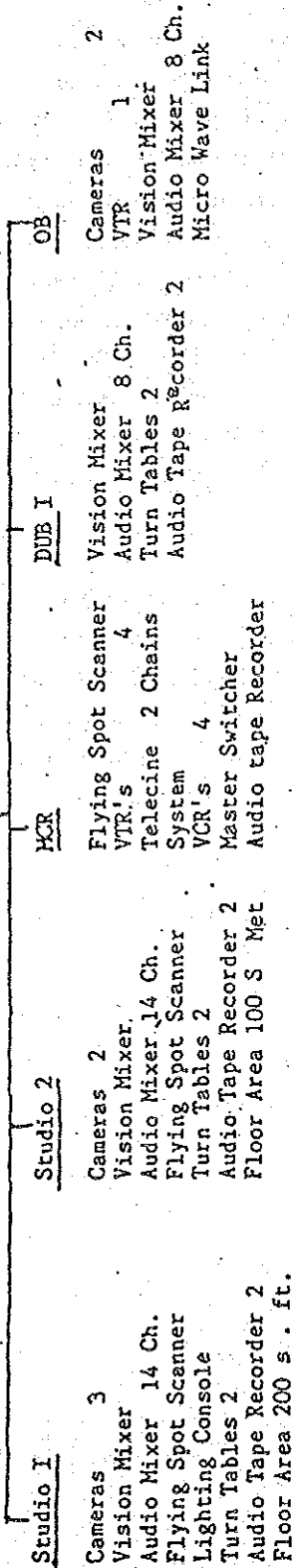
### Studio Complex (Fig 6)

The Studio Complex at Colombo comprises three studios and the main control room. Studio 1 and 11 have been in operation since the inception of the Corporation in 1982. It has a floor area of 200 square meters and is equipped with three cameras. It has a manually operated batten lighting system. It is used mainly for the production of small dramas, musical shows, children's programmes and quiz shows. Studio 11 is the smallest studio with a floor area of 100 square meters equipped with two cameras and is used as the News Studio. In addition, interviews and ETV programmes are also recorded in this Studio. (Fig7) Studio 111 became operational in 1986 with the second phase of aid provided by the Japanese government to the National Television Network in Sri Lanka. It is by far the largest Studio with a floor area of 400 square meters. It has all the sophisticated equipment one can boast of.

At present Rupavahini is planning to expand its TV service so as to give the public more educational if not enrichment programmes in 1992. The Engineering Division has set aside Channel 7 at Pidurutalagala, Channel 10 at Kokavil and Kandy, Sooriyakanda and Namunukula on UHF for this purpose. It is hoped to commence experimental transmissions toward the end of 1991. This development is under Phase III of the Japanese grant aid project.

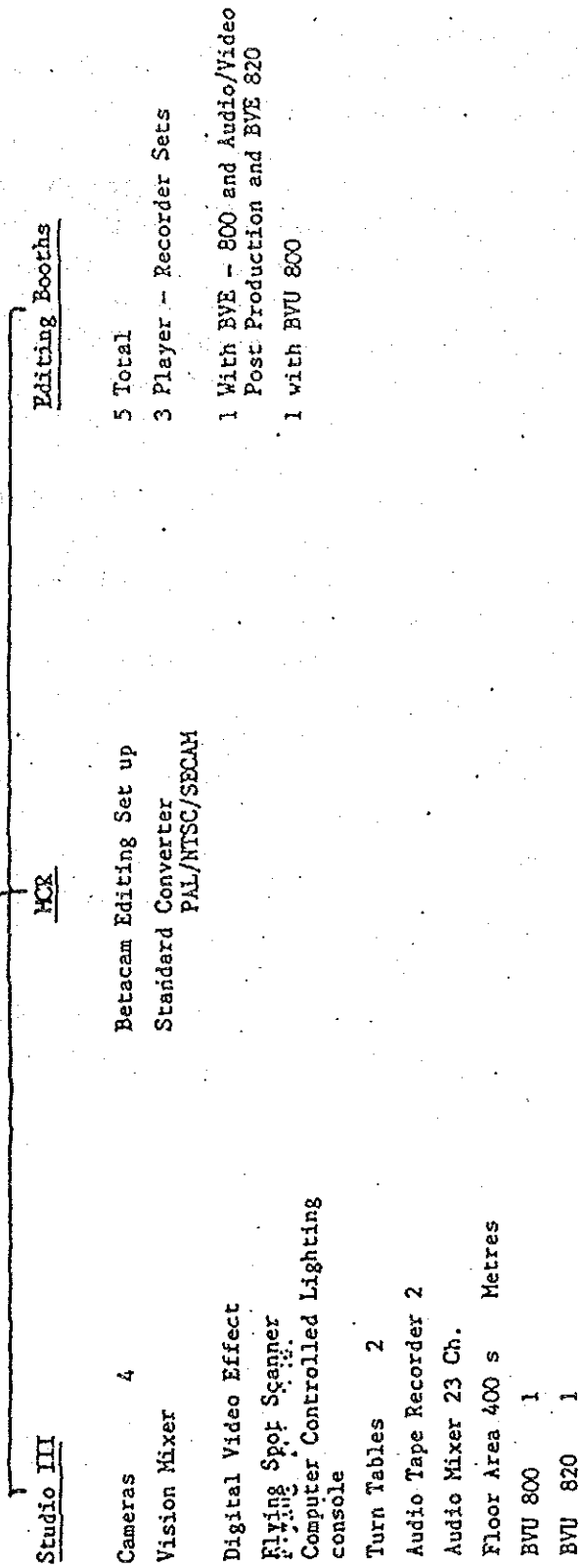
RUPAVAHINI TECHNICAL FACILITIES

Phase I



RUPAVAHINI TECHNICAL FACILITIES

Phase II

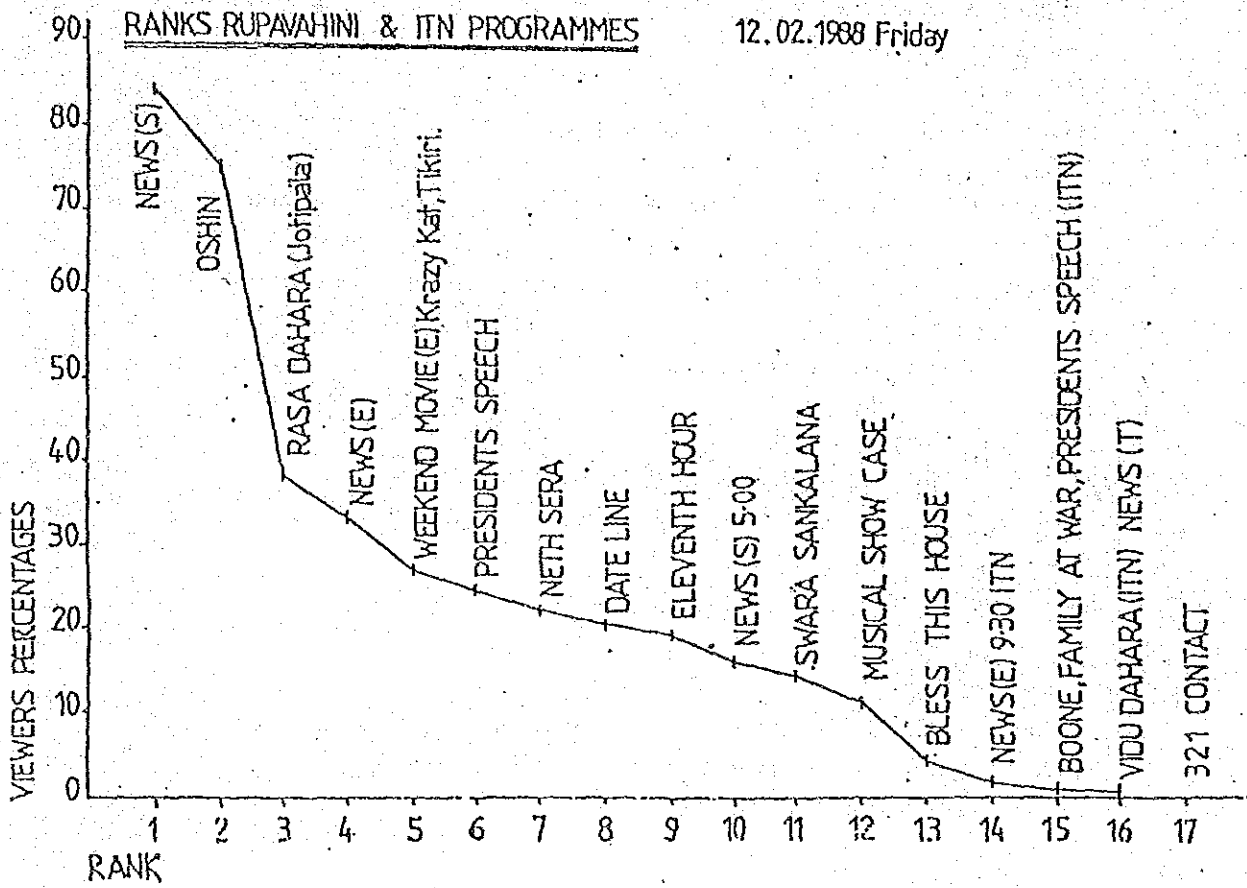


Japanese assistance towards the development of TV

Japanese assistance to TV in Sri Lanka was not confined only to technical assistance and training. Their generosity was extended even to areas of consultancy and programmes. JICA has continuously provided the assistance of technical and programmes experts since 1982. Thus it would be only proper to discuss the present situation of TV broadcasting in Sri Lanka by acknowledging their contribution since they have been partners in the progress and development of television in Sri Lanka. The staff of the Technical and Programmes Division I have <sup>no</sup> doubt will always remember with gratitude the services rendered by Mr Hattori, Mr S.Nakamura, Mr Y.Tamura, Mr Takayanagi, Mr H.Niwa and at present by Mr M.Sasaki. We have also to welcome Mr Yamasaki.

In addition many programmes of great value had been gifted to Rupavahini by NHK and the Hosokawa Bunka Foundation. The most remarkable if not outstanding were the documentary series 'Silk Road' and the serial 'Oshin' both produced by NHK and donated through a grant aid provided by the Hosokawa Bunka Foundation. The first instalment of this fascinating teledrama 'Oshin' consisting of 48 - 15 mins episodes have already been telecast. Its theme, its treatment and acting were of a very high standard so much so that it ranked 2nd only to the Sinhala News in an audience survey that was conducted (Fig 8). 'Oshin' stood out as an excellent example of a TV drama among many other local as well as foreign programmes. Its popularity was so great that very soon our viewers will be able to see a repeat telecast, since the programmes will be dubbed into Sinhala. Rupavahini will also obtain the entire series of 'Oshin' consisting of another 226 - 15 mins episodes. The Hosokawa Bunka Foundation has already agreed to grant SLRC Y 3,000,000.00 as a first instalment towards the procurement of the remaining episodes of 'Oshin'.

(Fig 8)



### Audience Survey & Research Unit

The Audience Survey and Research Unit formed with the commencement of the Sri Lanka Rupavahini Corporation in 1982. This small unit comes directly under the Director General and is headed by a Chief Research Officer. He is assisted by four Research Officers, all of them are honours graduates. There is a one typist-clerk, one data tabulator and one office aid to assist the unit.

This unit has been consistently carrying out surveys and researches on the television audience and on some of the Rupavahini programmes. Most of the surveys are based on statistically sound and representative samples selected at random. Sample size varied from 200 to 2000 households. Following categories of field surveys and studies have been carried out.

1. Audience surveys
2. Special surveys on programmes
3. Other ad-hoc surveys
4. Programme ratings
5. Monitoring of Programmes
6. Entrusting research studies to outside scholars
7. Seminars
8. Monthly Statistical Analysis of air time
9. Annual Statistical Analysis of air time

Audience Survey & Research Unit also provide valuable information to Producers and other Researchers in the field and is helping Rupavahini in a big way to target programmes better.



#### 4. 国営テレビに関する新聞記事



# New Rupavahini boss anxious to cover countryside

By Chitra Weerasinghe

It's a little over a month since Nuwara Eliya's Government Agent, Kumar Abeyasinghe, slipped into his new seat as Rupavahini's chairman and set about his duties unobtrusively, taking to his work easily.

Easy it was, no doubt, for the media was for him, a familiar business. "Men and machines in this institution are no strangers to me. So it's like coming home," says Mr. Abeyasinghe who served as SLBC's news

came daily to see me about their problems".

To these 50 - 60 people who came to share their sorrows with the *egazinha urnhe*, their only source of strength, Mr Abeyasinghe left no stone unturned by way of help or consolation.

"Their stories helped me to look at life more realistically and I miss that interaction now. Nevertheless, the experience I gained should help me in my new job".

Apart from the satisfaction of helping the villagers, Mr Abeyasinghe has also had to contend with a few major disasters in Nuwara Eliya at various times.

"Though we were able to control the 1983 riots, there were the 1984 and 1986 racial riots too which we had to tackle and bring about redress with government assistance."

Organising three elections - the presidential, referendum and provincial council were not



easy. And all these have made him "hardy", he says.

Hard work, a busy schedule, disasters or whatever there be - life in Nuwara Eliya was more leisureed and relaxed. There was a time for work, exercise, relaxation, entertainment and going to bed unlike in Colombo where anything can take you by storm at any time of day.

"I had a small patch of jungle in the Residency garden where I could sit among the pine trees. A brisk early morning jog and one in the evening too before I finally sat beside the fire with my family", were other ways which helped him counteract the tensions of a busy day.

to Colombo and linked with coverage of seminars, openings and other events with not enough time given to events in the rural areas," he said.

Though Mr Abeyasinghe agrees with this criticism he shared the view that SLBC's TV station capacities were limited.

"We don't have enough people to send out and we don't have equipment to cover the entire country", he said.

One way in which he sees a solution is by trying to build up a strong news gathering team in the countryside, training new people, giving them the necessary equipment and making them produce what the station needs.

"Already we have people lined up in the outstations but they haven't had the training yet".

Another area he is keen on improving is coverage of world news and he plans to introduce new programmes.

"I like to open the TV station for new talent and give a bigger and better place to children's and drama, encourage school orchestras", says this man who's already got cracking.

More photos to MDC Ambassador h.

Gif pic ma Mr. Perer of Mc who Lank eight handi Prasa; Gener Mount sixteen of SriL hande office ewarc Lanke The is va milio; than : Sri Lr work cator 1578 mar



## 5. 講演に使用したテキスト



# OUTLINE OF BROADCASTING IN JAPAN

Ministry of Posts and Telecommunications

CONTENTS

1	Short History .....	1
2	Broadcasting Structure .....	1
3	Licensing of the Broadcasting Station .....	2
4	Broadcasters .....	3
5	Regulations on Broadcasting Programs .....	6
6	Cablecasting .....	8
7	Government Organization for Broadcasting Administration .....	9
	(APPENDIX) .....	11



## 1 Short History

Broadcasting in Japan started in 1925, five years after the world's first broadcasting made its debut in the U.S.A. In 1926, the Broadcasting Corporation of Japan (NHK), the predecessor of the present NHK, was established as a corporate juridical person succeeding the assets of three broadcasting stations at Tokyo, Osaka and Nagoya which conducted broadcasting the year before. Incidentally, BBC was established in 1922 and NBC in 1926.

Soon afterwards, a nationwide radio network was completed and the second radio network took its first steps in 1931.

With the enforcement of new Radio and Broadcast Laws in 1950, the NHK was reorganized into a special public corporation -- The Japan Broadcasting Corporation (NHK) --, and in 1951, private broadcasting companies were established.

In 1953, television broadcasting started. That year, both NHK and private broadcasters began to put on air their television programs.

In 1959, the educational television broadcasting network of the NHK was inaugurated.

In 1960, nationwide color television was officially recognized and both NHK and private broadcasting companies started color television broadcasting.

In 1969, NHK started FM broadcasting all over the country, and the next year private broadcasters followed.

TV sound multiplex broadcasting was introduced in 1978, and is now operated by more than half of all broadcasters, and TV written information multiplex broadcasting (Teletext Service) was introduced in 1983, and is now nationally operated by NHK and partly operated by private broadcasters in Tokyo, Osaka, Nagoya and Fukuoka areas.

In 1984, NHK started direct satellite broadcasting (1-ch service) for the first time in the world, in 1986, started 2-ch service.

In 1985, the University of the Air inaugurated their service to the public.

## 2 Broadcasting Structure

### (1) Coexistence system of NHK, The University of the Air Foundation, and Private Broadcasters

In the field of broadcasting in Japan, incorporating the principle of competitive broadcasting service is being provided by the coexistence

system of NHK, and The University of the Air Foundation, both public corporations and private broadcasters as a free enterprise without any restriction on its form of management and financial resources.

The Japanese people can enjoy these broadcastings from early morning until midnight, sometimes around the clock. For example, in this Tokyo area a large variety of broadcast services are available as follows: Two TV channels, two medium wave radio (AM), and one FM broadcast of NHK (a total of five broadcasts); one TV and one FM of The University of the Air Foundation; five TV; three AM; one FM; and one domestic shortwave broadcast of private broadcasters (a total of 8 TV; 5 AM; 3 FM; and 1 shortwave).

## (2) Laws Governing Broadcasting

### 1) Radio Law

Anyone desiring to establish a broadcasting station shall be subject to supervision under the Radio Law as the applicant or licensee of the radio station. (License of broadcast station, and renewal of license every three years).

### 2) Broadcast Law

With respect to management after establishing a broadcasting station, the licensee shall be subject to supervision under the Broadcast Law.

### 3) Cable Television Broadcasting Law

### 4) Law to regulate the operation of the cable sound broadcasting service

## 3 Licensing of the Broadcasting Station

### (1) Procedure for Licensing

The procedure for licensing of the broadcasting station in accordance with the Radio Law is in the following order.

Application for license -- examination of application -- preliminary license -- inspection upon completion of construction -- issuance of license

The license is valid for three years, which shall be subject to renewal every three years.

### (2) Standards for Licensing

The Radio Law provides the following four items with respect to the standards of licensing, and a preliminary license is granted if they are fully complied with.

Article 7 paragraph 1 of the Radio Law stipulates the following as the standards for examination of applications for a license.

- a. Conformity of facilities to the technical standards stipulated in the Radio Law.
- b. Feasibility of frequency assignment
- c. A sound financial basis capable of performing the expected service.
- d. Compliance with the basic standards for the establishment of broadcasting stations stipulated by the ordinance of the Ministry of Posts and Telecommunications.

#### 4 Broadcasters

##### A. NHK

###### (1) Purpose of NHK

NHK is a public corporation established in accordance with the Broadcast Law with the purpose of "to conduct its broadcasting for public welfare in such a manner that its broadcasting may be received all over Japan" (Article 7 of the Law). In view of its characteristics as an organ of expression unlike other governmental institutions, extensive autonomy is granted in its operations including personnel management and budget.

###### (2) Officers

Officers of NHK include members of the Board of Governors, President, Vice President, Directors and auditors.

###### 1) Board of Governors

The Board of Governors is the supreme decision making organ of NHK. The reason for setting up a Board of Governors is that as NHK's operations are of such special nature as a broadcasting, the government tries not to get involved excessively, on the other hand, an area and field representative system shall be applicable in election of the Governors so that the will of the people may be reflected as directly as possible.

The Governors (12) shall be appointed by the Prime Minister with the consent of both Houses of the Diet, and the Chairman shall be mutually elected.

###### 2) President, Vice President, and Directors (Executive Organ)

The President shall be appointed by the Board of Governors, while the Vice President and Directors shall be appointed by the President with the consent of the Board of Governors. Unlike governmental institutions,

appointment by the government which is frequently common is not applicable. This is because extensive autonomy is granted to NHK.

### 3) Auditors

Auditors shall be appointed by the Board of Governors, and the results of auditing shall be reported accordingly. Matters to be subject to auditing shall be "duties to be discharged by the President, Vice President and Directors."

## (3) Main Business Activities

### 1) Domestic Broadcasting

NHK maintains 2 television networks (General TV and Educational TV), 2 AM networks (Radio 1 and 2), 1 FM network and the experimental satellite broadcasting for domestic service.

### 2) Overseas Broadcasting (Radio Japan)

Radio Japan's broadcasts are beamed to 18 regions throughout the world in 21 languages for a total of 43 hours a day.

The overseas broadcasting includes not only NHK's own, but also those directed by the Minister of Posts and Telecommunications, and NHK is broadcasting by incorporating both of these.

70 percent of Radio Japan's programs are related to news, and they are appreciated by listeners throughout the world because they are impartial and neutral.

## (4) Finance

### 1) Receiving Fees

a. The Main financial source of NHK is receiving fees. (Commercials are prohibited.) As for the receiving fees the Broadcast Law stipulates that "any person who is equipped with a receiving set capable of receiving broadcast provided by the corporation shall conclude a contract with the corporation," thus forcing the audience to conclude a receiving contract.

b. The amount of the receiving fee (monthly) which is the basis of the receiving contract shall be decided by the Diet which approves the budget for revenues and expenditures of NHK.

Monthly receiving fee for monochrome -- ¥680

Monthly receiving fee for color -- ¥1,040

Total contracted households -- about 31.95 million

2) Budget for Revenues and Expenditures

- a. NHK shall prepare a budget for revenues and expenditures, a business plan, and a financing plan for each business year (April to March) to be submitted to the Minister of Posts and Telecommunications, who shall study and submit the same with his comments to the Diet through the cabinet for approval.
- b. Failing to obtain approval of the Diet provisional budget (for not longer than three months) may be formed subject to approval of the Minister of Posts and Telecommunications.

(5) Management scale of NHK

Budget for fiscal 1988 (April - March 1989), business revenues about ¥351.1 billion.

**B. The University of the Air Foundation**

The University of the Air Foundation was instituted on July 1, 1981, as a corporation being authorized to institute the University of the Air and to establish broadcasting stations by the University of the Air Foundation Law. The University of the Air is a university providing education by means of Television and FM radio broadcasting in order to respond to people's diversified demands for having the opportunities of university education.

The university inaugurated the service to the public from April 1, 1985. At the first stage, the area being able to receive the broadcasting services is limited to Tokyo and its neighboring area.

**C. Private Broadcasters**

(1) Discipline of Private Broadcasters

Except where the Broadcast Law provides some provisions with respect to broadcast programs, there are no provisions for style of management, organization or financial resources. This may partly be due to the fact that when the Broadcast Law was enacted the prospect of future private broadcast could not be envisaged, and at the same time it may also be understood that development as a free enterprise reflecting creative and fresh ideas was hoped for.

(2) Licensing Policy for Private Broadcasters

- 1) Unlike NHK, private broadcasters shall not broadcast on a nationwide scale as an individual enterprise (except shortwave broadcast).

- 2) The foundation of private broadcasting enterprises shall be closely connected to local regions (both in human and financial elements).
- 3) In order to eliminate monopoly of the mass media,
  - a. In principle, one party shall not own or control more than one key station.
  - b. In principle, one party shall not own or control three enterprises, radio, TV and newspaper.

### (3) Development of Private Broadcasters

Since preliminary license was granted to 16 private radio broadcasters in 1951, the development of private broadcasters has been so remarkable that the total number of TV and radio broadcasters has now reached 149. Their form of management is all stock companies with their main source of income from advertisement broadcasting. Each company having concluded a mutual program supply contract forms a so-called broadcasting network.

As for advertisement, in 1951 when commercial radio broadcasting started, advertisers spent only 300 million yen for their ads. However, in 1986, 1070 billion yen was spent for television ads and 158 billion yen for radio out of 3051 billion yen for all kinds of ads.

The business income of all private broadcasters for 1986 amounts to 1422 billion yen.

### 5 Regulations on Broadcasting Programs

Broadcasting stations are regulated by the Radio Law in the aspect of station licence and operation like other radio stations.

On the other hand broadcasters are subject to the regulation by the Broadcast Law in the aspects of the programming and other business matters. This is because it is necessary to regulate broadcasting so as to meet the public welfare and to strive for the sound development thereof, in view of its powerful influence on our daily life.

As to the programming, the Broadcast Law guarantees, in principle, the freedom of program compilation and broadcasters have a responsibility to ensure the appropriateness of their program contents according to self-restraints. In order to oversee that function is properly carried out, the Broadcast Law stipulate the broadcast standards as follows.